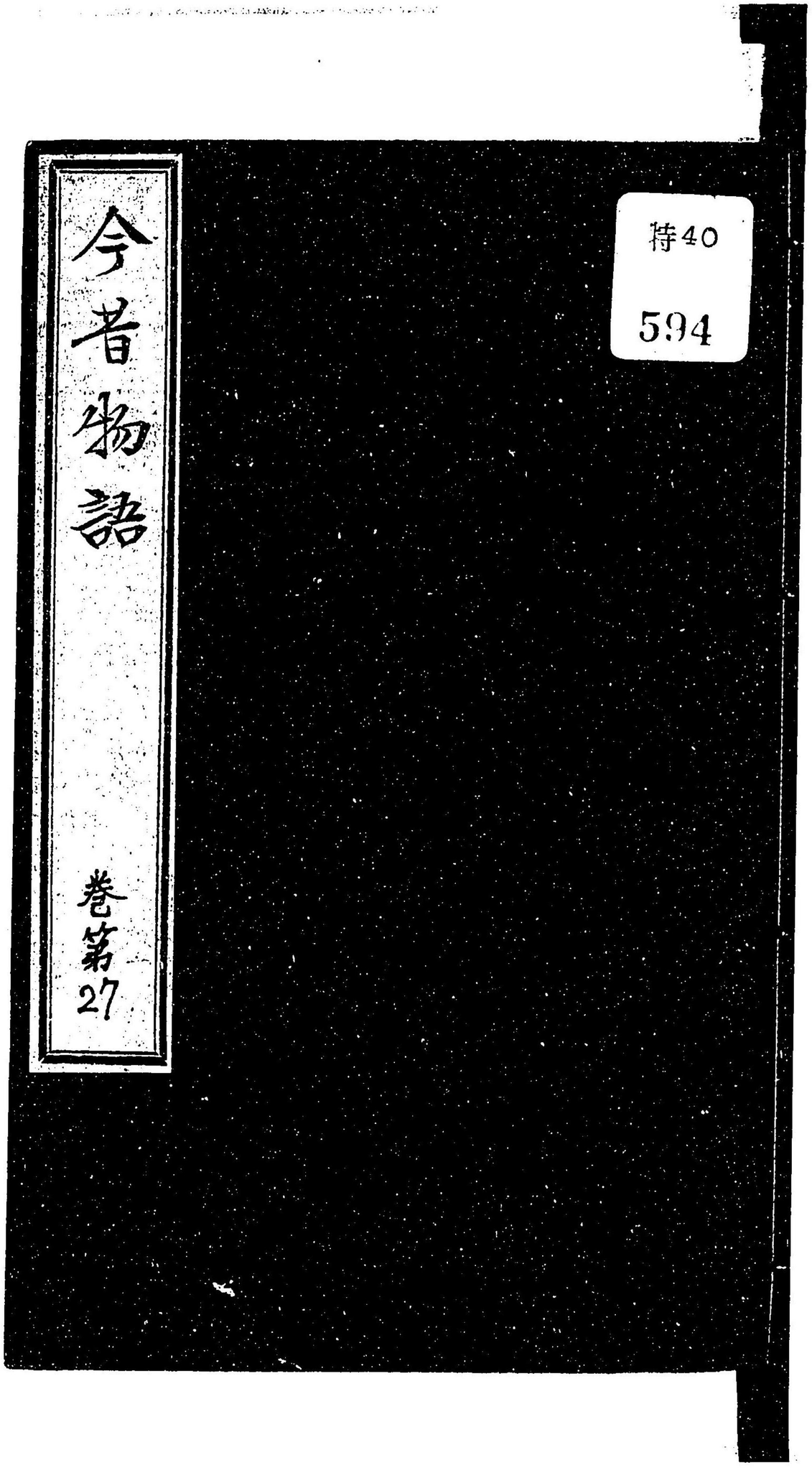


088991-005-5

特40-594

今昔物語集 巻第22-31

近藤 圭造／刊

M15

DBL-0165

今昔物語集卷第廿七

本朝付靈鬼

三條東洞院鬼殿靈語第一
川原院融左大臣靈宇多院見給語第二
桃園柱穴指出兒手招人語第三
冷泉院東洞院僧都殿靈語第四
冷泉院水精成人形被捕語第五
東三條銅精成人形被堀出語第六
在原業平中將女爲鬼被噉殺語第七
於內裏松原鬼成人形噉女語第八
參官朝臣弁爲鬼被噉語第九

仁壽殿臺代御燈油取物來語第十
或所膳部見善雄伴大納言靈語第十一
於朱雀院被取餌袋菓子語第十二
近江國安義橋鬼噉人語第十三
從東國上人値鬼語第十四
產女行南山科値鬼逃語第十五
正親太夫□□若時値鬼語第十六
東人宿川原院被取吸妻語第十七
鬼現板來人家殺人語第十八
鬼現油瓶形殺人語第十九
近江國生靈來京殺人語第二十
美濃國紀遠助値女靈遂死語第二十一
獵師毋成鬼擬噉子語第二十二
播磨國鬼來人家被射語第二十三
人妻死後成本形値舊夫語第二十四
女見死夫來語第二十五
河內禪師牛爲靈被借語第二十六
白井君銀提入井被取語第二十七
於京極殿有詠古歌音語第二十八
雅通中將家在同形乳母二人語第二十九
幼兒爲護枕上蒔米付血語第三十
三善清行宰相家渡語第三十一

民部太夫賴清家女子語第三十二
西京人見應天門上光物語第三十三
被呼姓名射顯野猪語第三十四
有光來死人傍野猪被殺語第三十五
於播磨國印南野殺野猪語第三十六
狐變大杉木被射殺語第三十七
狐變女形值播磨安高語第三十八
狐變人妻形來家語第三十九
狐託人被取玉乞返報恩語第四十
高陽川狐變女乘馬尻語第四十一
左京屬邦利延值迷神語第四十二
賴光郎等平季武值產女語第四十三
通鈴鹿山三人入宿不知堂語第四十四
近衞舍人於常陸國山中詠歌死語第四十五

三條東洞院鬼殿霊語第一

今昔此の三條よりゝ北東の洞院よりゝ東の角は鬼殿と云所也其の所に霊有けり其霊ゝ昔し未た此の京の都移も无かりける時其の三條東の洞院の鬼殿の跡に大なる松木有けり其の邊を男の馬に乗て胡録負て行き過ける程に俄に雷電霹靂して雨痛く降けれは其の男否不過すして馬より下て自ら馬を引へて其の松の木の本に居たりける程に雷落懸りて其の男をも馬をも蹴割殺してけを然て其の男やがて霊に成にけり其後都移有て其の所人の家ゝ成て住むと云へとも其霊其の所を不去すして于今霊にて有とそ人ゝ語り傳へたる極て久く成たる霊也かゝ然れゝ其の所にゝ度々不吉ぬ事共有けりとなむ語り傳へたるとや

川原院融左大臣霊宇陁院見給語第二

今昔川原の院ゝ融の左大臣の造て住給ける家なり陸奥の國の鹽竈の形を造て潮の水を汲入て池に湛へたりけり樣々に微妙く可咲き事の限を造て住給けるを其の大臣失て後ゝ其の子孫にて有ける人の宇陁の院に奉たりける也然れは宇陁の院其の川原の院に住せ給ける時に醍醐の天皇ゝ御子ゝ御せゝ度々行幸有て微妙くりけり然て院の住せ給ける時に夜半許に西の臺の塗籠を開て人のそよめきて參る氣色の有けれゝ院見遣せ給けれゝ日の裝束直しくしたる人の大刀帶て劔取り長りて二間許去さて居たりけるを院彼ゝ何に人そと問せ給けれゝ此の家の主に候ふ翁也と申けれゝ院融の大臣かと問せ給けれゝ然に候ふと申すゝ院其れゝ何そと問ゝせ給へゝ家に候へゝ住候ふゝ此く御ませゝ忝く所せく思給ふる也何かは可仕きと申せゝ院其れゝ糸異樣の事也我れは人の家をやゝ押取て居さる大臣の子孫の得させたれはこそ住しめて者の霊也と云へとも事の理をも不知す何て此ゝ云そと高やかに仰せ給けれゝ霊掻消ゝ樣ゝ失にけり其の後久現るゝ事无かりけり其の時の人此の事を聞て院をそ忝く申ける猶只人ゝゝ似させ不給さりけり此の大臣の霊ゝ合て此樣ゝ痙やかに異人ゝ否不答しかしとそ云けるとなむ語り傳へたるとや

桃園柱穴指出見手招人語第三

今昔桃園と云ゝ今の世尊寺也本ゝ寺にも无くも有ける時に西の宮の左の大臣なむ住給ける其の時ゝ寢殿の辰巳の母屋の柱に木の節の穴開たりける夜るに成れゝ其の木の節の穴より小さき兒の手を指出て

人を招く事なむ有ける大臣此れを聞給て糸奇異(アヤマシ)く怪ひ驚て其の穴の上に經を結付奉たりけれども尚招けれゝ佛を懸奉たりけれども招く事尚不止さりけり此く様々すれども敢て不止らす二夜三夜を隔て夜半許る人の皆寢ぬる程に必す招く也けり而る間或る人夕試むと思て征箭を一筋其穴に指入たりけれは其の征箭の有ける限ゝ招く事无かりけれゝ其後箭柄をゝ拔て征箭の身の限を穴に深く打入れたりけれゝ其より後ゝ招く事絶にけり此れを思ふる心得ぬ事也定めて者の靈なとの爲る事にこそゝ有けめ其れに征箭の驗當る佛經に增り奉て恐むやゝ然れゝ其の時の人皆此れを聞て此なむ怪しひ疑ひけるとなむ語り傳へたるとや

冷泉院東洞院僧都殿靈語第四

今昔冷泉院よりゝ南東の洞院より東の角ゝ僧都殿と云ふ極たる惡き所也然れゝ打解て人住む事无りけり而るに其れ冷泉院よりゝ只北ゝ左大弁の宰相源の扶義と云ける人の家也其の左大弁の宰相の舅は讃岐の守源の是輔と云ける人也其れに其の家にて見けれゝ向の僧都殿の戌亥の角にゝ大に高き樓の木有けり彼れゝ誰そ時に成れゝ寢殿の前より赤き單衣の飛て彼の戌亥の樓の木の方樣に飛て行て木の末になむ登ける然れゝ人此れを見て恐て當りへも不寄さりける に彼の讃岐の守の家に宿直しける兵也ける男の此の單の飛行くを見て已ゝしも彼の單衣をゝ射落してむかしと云けれゝ此れを聞く者共更に否不射じと諍をして彼の男を勵まし云けれゝ男必す射むと諍ひて夕暮方に彼の僧都殿に行て南面なる簀子に和ら上て待居

たりける程に東の方1竹の少し生たりける中より此の赤單衣例の樣に飛て渡けるを男鴈胯を弓に番て強く引て射たりけれゝ單衣の中を射貫ぬくと思ける1單衣ゝ箭立乍ら同樣に樸の木の末に登りにけり其の箭の當りぬと見る所の土を見けれゝ血多く泛たりける男ゝ本の讃岐守の家に返て諍つる者1共會て此の由を語けれゝ諍ふ者共極く恐けり其の兵ゝ其の夜寢死になむ死にけり然れゝ此の諍ふ者共より始て此れを聞く人皆益无き態して死たる者かなとなむ云ひ謗ける實に人ゝ命に增物ゝ无きに由无く猛き心を見えむとて死ぬる極て益无き事也となむ語り傳へたるとや

冷泉院水精成人形被捕語第五

今昔陽成院の御ましける所ゝ二條よりゝ北西の洞院よりゝ西大炊の御門よりゝ南油の小路よりゝ東二町になむ住せ給けるに院の不御さて後にゝ其の冷泉院の小路をゝ開て北の町ゝ人家共に成て南の町にそ池なと少し殘て有ける其れにも人の住ける時に夏ころ西の臺所に人の寢たりけるを長三尺許有る翁の來て寢たる人の顏を搜けれゝ怪と思けれ共怖しくて何かにも否不爲すして虛寢をして臥たりけれゝ翁和ら立返て行くを星月夜に見遣けれゝ池の汀1行て搔消つ樣に失にけり池掃ふ世も无けれゝ萍昌蒲生繁て糸六借氣にて怖し氣也然れゝ彌よ池に住む者1や有てむと怖しく思ける1其後夜々來つゝ搜けれゝ此れを聞く人皆恐合たる程に兵立たる者有ていて己れ其の顏搜るらむ者必す捕へむと云て其の延に只獨り苧繩を具して臥して終夜待けるに宵の程不見えさりけり夜半ゝ過やゝぬらんと思ふ程1

待ゝねて少し□たりけるに面に物の氷やゝかに當りけれゝ心懸て待つ事なれゝ寢心にも急と思えて驚くまゝに起上て捕へつゝ苧繩を以て只縛りに縛て高欄に結付つ然て人に告れゝ人集て火を燈して見けれゝ長三尺許なる小翁の淺黃上下着たるゝ可死氣ある縛り被付て目を打叩て有り人物問へとも答へも不爲す暫許有て少し咲て此彼見廻して細く侘し氣ある音にて云く盥に水を入れて得むやと然れは大きなる盥に水を入て前に置たれゝ翁頸を延へて盥に向て水影を見て我れゝ水の精そと云て水よつふりと落入ぬれゝ翁ゝ不見ぬす成ぬ然れは盥に水多く成て鉉よを泛る縛たる繩は被結乍ら水に有り翁は水に成て解にけれは失ぬ人皆此れを見て驚ゆ奇けり其の盥の水をゝ不泛さすして掻て池に入にけり其より後翁來て人を搜る事无ゝ

りけり此れは水の精の人に成て有けるとそ人云けるとぞ語り傳へたるとや

東三條銅精成人形被掘出語第六

今昔東三條殿に式部卿の宮と申しける人の住給ひける時に南の山より長三尺許なる五位の太りたるゝ時々行けるを御子見給て怪ひ給ひけるに五位の行く事既に度々よ成にはれは止事无き陰陽師を召して其祟を被問けれは陰陽師此れは物の氣也但し人の爲に害を可成き者には非すと占ひ申けれは其の靈は何こに有そ然何の精の者にて有そと被問けれは陰陽師此れそ銅の器の精也宮の辰巳の角に土の中に有と占ひ申したりけれは陰陽師の申すに隨て其の辰巳の方の地を破て然占はせけるに占に當たる所の地を二三尺許掘て見るよ（求タ）无し陰陽

師尚可堀き也更ゝ此は不離ーと占ひ申けれは五六寸許堀る程に五斗納許なる銅の提を堀出たり其後よりなむ此の五位行く事絶にけり然れは其銅の提の人に成行けるにこそと有らめ糸惜き事也此れを思ふに物の精は此く人に成る現する也けりとなむ皆人知ゝけりとなむ語り傳へたるとや

在原業平中將女被噉鬼語第七

今昔右近の中將在原の業平と云ふ人有けり極き世の好色にて世ゝ有る女の形ち美と聞くそは宮仕人とも人の娘をも見殘す无く員を盡して見むと思けるゝ或る人の娘の形ち有樣世に不知す微妙ーと聞けるを心を盡して極く假借しけれとも止事无からむ智取をせむと云て祖共の微妙く傳けれは業平の中將力无くして有ける程に何にしてゝ搆へけむ彼の女を密に盗出ーてけゝ其れゝ忽に可將隱き所の无かりけれゝ思ひ繚て北山科の邊に舊き山庄の荒て人も不住ぬ所有けるに其の家の内に大なるあせ倉有けり片戸ゝ倒れてなむ有ける住ける屋ゝ板敷の板も无くて可立寄き樣も无かりけれゝ此の倉の内に疊一枚と具ーて此の女を具ーて將行て臥せたりける程に俄ゝ雷電霹靂して曇けれゝ中將大刀を拔て女をゝ後の方ゝ押遣て起居てひらめかーける程に雷も漸く鳴止にけれは夜も曉ぬ而る間女音不爲さをけれゝ中將怪むて見返て見るゝ女の頭の限と着たりける衣共と許殘たり中將奇異く怖ーくて着物をも不取敢す逃て去にけり其れより後なむ此の倉ゝ人取り爲る倉とは知ける然れは雷電霹靂にゝ非すして倉ゝ住ける鬼のーけるゝや有けむ然れは案内不知さらむ所にゝ努々

不立寄ましき也況や宿せむ事は不可思懸すとなむ語り傳へたるとや

於内裏松原鬼成人形噉女語第八

今昔小松の天皇の御代に武德殿の松原を若き女三人打群て内様へ行けり八月十七日の夜の事なれゝ月ゝ極て明し而る間松の木の本に男一人出來たり此の過る女の中に一人を引へて松の木の木景にて女の手を捕へて物語しけを今二人の女は今や物云畢て來ると待立てりけるに良久く不見ぬす物云ふ音も不爲さりければ何なる事そと怪しく思て二人の女寄て見るに女も男も无し此ゝ何くへ行にけるそと思こ吉く見れは只女の足手許離れて有り二人の女此を見て驚て走り逃て衛門の陣に寄て陣の人に此の由を告けれゝ陣の人共驚て其の所に行て見けれは凡そ骸散たる事无くして只足手のみ殘たり其時に人集り來て見嗤しる事无限し此れゝ鬼の人の形と成て此の女を噉てける也けりとそ人云ける然れゝ女然様に人離れたらむ所にて不知さらむ男の呼ゝむそは廣量して不行ましき也けり努可怖き事也となむ語り傳へたるとや

参官朝廳弁爲鬼被噉語第九

今昔官の司に朝廳と云ふ事行ひけり其れゝ未た曉にを火燈して人ゝ参ける其の時に史□□乃□□と云ける者遲参したりけり弁□□の□□と云ける人は早参して座に居たりけり其の史遲参したる事を怖れて念ひ参けるに中の御門の門に辨の車の立たりけるを見て辨ゝ参りにけりと云ふ事を知て官に念き参るに官の北の門の内の屏の許に辨

の雑色小舎人童なと居たり然れは史辨乃被早參にけるよ我れ史にて遲參したる事を怖れ思て忿きて東の廳の東の戸の許に寄て廳の内を臨けは火も消よけり人の氣色も无し史極て怪く思て辨の雑色共の居たる屏の許に寄て辨の殿ゝ何こに御ますそと問へは雑色共東廳に早く着せ給ひにきと答ふれゝ史主殿寮の下部を召して火を燃させて廳の内よ入て見れは辨の座に赤く血肉なる頭の髪所々付たる有り史此は何にと驚き怖れて傍を見れゝ笏沓も血付て有り太扇有り辨の手を以其の扇よ事の次第共被書付たり疊に血多く泛たり他の物は露不見奇異き事无限而る間に夜曉ぬれは人多く來り集て見喧けり辨の頭をは辨の從者共取て去にけり其後其東廳にては朝廳を不行さりけり西廳よてなむ行ひける然れは公事と云乍ら然樣に人離れたらむ所にゝ可怖き事也此事ゝ水尾の天皇の御時となむ語を傳へたるとや

仁壽殿臺代御燈油取物來語第十

今昔延喜の御代に仁壽殿の臺代の御燈油を夜半許に物來て取て南殿樣に去る事毎夜に有る比有けを天皇此れを目さまーき事に思食ーて何て此れを見顯さむと被仰けるよ其時に□□辨源の公忠と云ける人殿上人にて有けるゝ奏ーて云く此の御燈油取る物をゝ捕ふる事ゝ否不仕らし少の事は仕り顯してむと天皇此れを聞食して喜はせ給ひて必す見顯はせと被仰けれゝ夜よ入て三月の霖雨の比明き所そら尚ー暗ー況や南殿の迫ゝ極く暗きに公忠の辨中橋より密よ拔足に登て南殿の北の脇に開たる脇戸の許に副立て者も不爲すーて伺けるよ丑の時に成やーぬらむと思ふ程よ物の足音ーて來る此れなめりと思ふに

御燈油を取る重き物の足音にてゝ有れとも體ゝ不見えす只御燈油の限り南殿の戸樣に浮て登けるを辨走り懸て南殿の戸の許にして足を持上て强く蹴けれゝ足ゝ物痛く當る御燈油ゝ打泛ーつ物ゝ南樣ゝ走り去ぬ辨ゝ返て殿上にて火を燈て足を見れゝ大指の爪缺て血付たり夜曉て蹴つる所を行て見けれゝ蘇枋色なる血多く泛て南殿の塗籠の方樣に其血流れたり塗籠を開て見けれゝ血のみ多く泛て他の物ゝ无かりけり然れは天皇極く公忠の辨を感せさせ給けり此の辨ゝ兵の家なむとにゝ非ねとも心賢く思量有て物恐不爲ぬ人にてなむ有ける然れは此る物をも不恐ーて伺て蹴るそゝし異人は極き仰せ有と云ふとも然許暗に其の南殿の迫に只獨り立たりなむや其の後此の御燈油取る事絶て无かりけりとなむ語り傳へたりとや

或所膳部見善雄伴大納言靈語第十一

今昔□□の比天下に咳病盛りに發て不病ぬ人无く上中下の人病臥たる比有けり其れに或る所に膳部しける男家內の事共皆なーー畢てけれゝ亥の時許に人皆靜まりて後家へ出けるに門に赤き裘の衣を着冠ーたる人の極く氣高く怖し氣なる指合たり見るに人れ體の氣高けれゝ誰とゝ不知ねとも下蔦にゝ非さめりと思て突居るに此の人の云く汝ち我れをは知たりやと膳部不知奉すと答ふれゝ此の人忽云く我れゝ此れ古へ此の國に有りー大納言伴の善雄と云し人也伊豆の國に被配流て早く死にき其れゝ行疫流行神と成て有る也我れゝ心より外に公の御爲に犯を成して重き罪を蒙りきと云へとも公に仕へて有ー間我か國の恩多かりき此れに依て今年天下に疾疫發て國々の人皆可

病死かりつるを我れ咳病に申行つる也然れは世に咳病隙无し也我れ其の事を云聞かせむとて此に立たりつる也汝ち不可怖すと云て搔消つ様に失ぬけり膳部此れを聞て恐々家に返て語り傳へたる也其の後よりなむ伴大納言ハ行疫流行神にて有けりとは人知ける但し世に人多かれとも何て此の膳部に一も此の事を告けむ其も様こそハ有めら此なむ語り傳へたるとや

於朱雀院被取餌袋菓子語第十二

今昔六條の院の左大臣と申す人御けり名をは重信とそ申しける其の大臣方違に朱雀院へ一夜御けるに石見守藤原の頼信と云し者の其の時に瀧口にて有けるか其の大臣の御許に有けれは其の頼信を前立て朱雀院に遣て待居たれと有けれは頼信前立て朱雀院に行けるに大きなる餌袋に交菓子を鉉と等しく調へ入れて緋の組を以て上を強く封結にして頼信に預けて此れ持行て置たれとて給ひたりけれは頼信餌袋を取て下部ぬ持せて朱雀院に行にけり東の對の南面をひらき て火なと燃して頼信大臣の渡給ふを待ける程に夜漸く深更て大臣遅く御けれハ頼信待兼て傍に弓胡録を立て其の餌袋を抑て居たりける に眠たかりけれハ寄臥たりける程ぬ寝入にけり然れハ大臣の御する をも不知さりけるに大臣御して入て頼信か寝たるを驚かし給ける時 ぬ頼信驚て手迷をして劔を差て弓胡録を取て外の方に出ぬ其の後家 の子の君達大臣の前に集り居て徒然なるにとて其の餌袋を取寄せて 開て見るに餌袋の内に塵許も入たる物无し然れハ頼信を召て被問る に頼信か申す様頼信か白地目を仕り餌袋に目を放ち候はこそ人に

ハ被取候ハめ殿を罷出つるに餌袋を給ハりて殿の下部に持せて終道目不放候ぬ此に取入れてハやかて此て抑て候つる物を何てか失候ハん然てハ頼信か抑て寢入て候つる程に鬼なんをの取てけるにや候らむを云けれハ皆人恐ち騷けり實に此れ希有れ事とそ其の時の人云ける譬ひ持せたりける下部盜取とも少なをこそ取らして其れに跡形も无く物入たる氣も无くなむ有ける正しく頼信か語ーを聞て此く語り傳へたるとや

近江國安義橋鬼噉人語第十三

今昔近江の守□□の□□と云ける人其の國に有ける間館に若き男共の勇たる數居て昔今の物語おとしーて碁雙六を打萬の遊をーて物食酒飲なとーける次てに此の國に安義の橋と云ふ橋ハ古へハ人行けるを何に云ひ傳たるにか今ハ行く人不過すと云ひ出て人行く事无ーと一人か云けれハをそはえたる者の口聞き鑠々しく然る方に思え有ける者の云く彼の安義の橋の事實とも不思すや有けむ己れーも其の橋ハ渡なむりし極しき鬼也とも此の御館に有る一の鹿毛に乘たらハ渡なむと其の時に殘の者共皆有る限心を一にして云く此れ糸吉き事也直く可行き道を此る事を云ひ出てより横道するに實虛言も知らむ多此の主の心ろの程も見むと勵ましけれハ此男彌よ被早て諍ひ立にけり此く云ひ立にたる事なれハ互に强く諍ふを守此の事を聞て糸□く嘘ハ何事を云そと問けれハ然々の事を申す也と集て答けれハ守糸益无き事をも諍ける男かな馬に於てハ早く得よと云けれハ此の男物狂しき戯事に候ふ傍痛く候ふと云けれは異者共集て弊々し弱

々と勵ませは男の云く橋を渡らむ事の難きにハ非す御馬を欲りる様なるかは傍痛く也と異者共日高く成ぬ遲々と云て馬に移置て引出て取せたれハ男胸□るゝ様には思ゆれとも云ひ立にたる事なれハ此の馬の尻の方に油を多く塗て腹帶強く結て鞭手に貫入れて裝束輕びやかにして馬に乘て行くに既に橋爪より行懸る程胸□れて心地違ふ様に怖しけれとも可立返き事に非ねと行くに日も山の葉近く成て物心細氣也況や此る所なれと人氣も无く里も遠く被見遣て家も遥に煙幽にて破无く思々ふ行くに橋の半許に遠くてハ然も不見ぬさりつるに人居たり此や鬼ならむと思ふも靜心无くて見れは薄色の衣の□よかなるに濃き單紅の袴長やかにて口覆して破无く心苦氣なる眼見にて女居たり打長めたる氣色も哀氣也我にも非す人の落し置たる氣色にて橋の高欄に押懸て居たるかは人を見て耻かしく氣なる物から喜と思へる様也男此れを見るに更に來し方行末も不思えす搔乘せて行りはやと落懸るへく哀れに思へとも此に此る者の可有き様无けれは此れハ鬼なむめりとて過むと偏に思ひ成して目を塞て走り打て通るを此の女今や物云ひ懸と待けるに无音に過れハ耶彼れ主何とかは糸情无くてハ過き給ふ奇異く不思懸ぬ所に人の弃て行たる也人鄕まて將御せと云ふをも不聞畢す頭身の毛太る様に思えけれは馬を搔早めて飛ふかは如くに行くを此の女穴情无やと云ふ音地を響りす許也立走て來れは然れハよと思ふに觀音助け給へと念して奇異く驚き馬を鞭を打て馳れは鬼走り懸て馬の尻に手を打懸々々引つる に油を塗たれハ引外し引外して否不捕す男馳て見返て見れは面ハ朱

の色にて圓座の如く廣くして目一ッ有り長は九尺許にて手の指三ッ有り爪は五寸許にて刀の樣也色い綠青の色にて目は琥珀の樣也頭の髮い蓬の如く亂れて見るに心迷ひ肝消て怖しき事无限し只觀音を念し奉て馳する氣にや入鄕に馳入ぬ其の時に鬼吉や然りとも遂に不會さらむやいと云て搔消つ樣に失ぬ男い喘々く我れにも非て彼れは誰そ時に館に馳着たれい館の者共立騷て何々にと問けるに只消に消入て物不云に然れい集て抑へて心靜めて守も心もと无かりて問けれは有つる事を不落す語けれい守益无き物譯ひして徒に死にすらむにと云て馬をも取せてけり男したり顏にて家に返にけり妻子眷屬に向て此の事を語て恐けり其の後家に物の怪の有けれい陰陽師よ其の祟を問ふに其の日重く可慎しとトたりけれは其の日に成て門を

差籠て堅く物忌を爲るに此の男の同腹の弟只一人有けるか陸奥の守よ付て行にけるか其の母をも具して將下りたりけるに此の物忌の日しも返來て門を叩けるを堅き物忌也明日を過して對面せむ其の程い人の家をも借らむと云出たれい弟糸破无き事也日も暮ぬたり已一人こそ外よも罷らめ若干の物共をい何かせむ日次ての惡く侍れは今日は態と詣來たる也彼の老人は早う失給ひにしかは其事も自ら申さむと云入れたれは年來不審く悲く思ふ祖の事を思には胸□れて此れを可聞き物忌にこそ有けれと云て只疾く開よとて泣き悲て入れつ然れは庇の方よ先物食せなとして後に出向て泣々く語るに弟服黑くして泣々く云ひ居たり兄も泣く妻い簾の内に居て此の事共を聞く程よ何なる事をか云けむ此兄と弟と俄に取組てから〳〵と

上ゝ成り下に成り爲るを妻此は何に何にと云へは兄弟を下に成して其の枕なる大刀取て遣せよと云ふゝ妻穴極し物に狂ふかゝ此る事は爲るそと云ふ不取せぬを尙遣せよ然は我れ死ねとかゝと云ふ程に下なる弟押返して兄を下に押成して頸をふつと咋切落して踊下て行とて妻の方に見返り向て喜ーと云ふ顏を見れゝ彼の橋にて被追たりと語りし鬼の顏にて有り搔消つ樣に失ぬ其の時に妻より始めて家の內の者共皆泣き騷き迷へとも甲斐无くて止にけり然れは女の賢きは弊き事也けり若干く取置ける物共馬なとと見けるは萬の物の骨頭なとにてそ有ける由无き詞をして遂に命を失ふ愚なる事とそ聞く人皆此の男を語ける其の後樣々の事共をして鬼も失にけれは今は无しとなむ語り傳へたるとや

從東國上人値鬼語第十四

今昔東の方より上ける人勢田の橋を渡て來ける程ゝ日暮にけれは人の家を借て宿らむと爲るに其の邊に人も不住ぬ大きなる家有けを萬の所皆荒て人住たる氣无し何事に依て人不住すと云ふ事をも不知ぬとも馬より下て皆此ゝ宿ぬ從者共ゝ下なる□□□□□□□所に馬なと繫て居ぬ主ゝ上なる所に皮なと敷て只獨り臥たりけるに旅にて此く人離れたる所なれは不寢もして有けるに夜打深更る程ゝ火を髣ゝ燈したりけるに見れは本よりも傍ゝ大きなる鞍櫃の樣なる物の有けるかゝ人も不寄ぬにころ〳〵と鳴て蓋の開けれゝ怪と思て此ゝ若し此に鬼の有けれゝ人も不住さりけるを不知すして宿ゝけるにやと怖しく て逃なむと思ふ心付ぬ然氣无くて見れは其の蓋細目に開たりけれ

は漸く廣く開く樣に見らけれは此は定めて鬼也けりと思て忽に念き逃て行かは追て被捕なむ然れは只然氣无くて逃けむと思得て云く馬共の不審き見むと云て起ぬ然れは密に馬に鞍取て置つれは這乘て鞭を打て逃くる時に鞍櫃の蓋をかさと開て出る者有り極て怖し氣なる音を舉て已い何こまて罷らむと爲るそ我れ此に有とは不知さりつるかと云て追て來たる馬を馳て逃る程に見返て見れとも夜なれい其体い不見えす只大きやゝなる者の云はむ方无く怖し氣也此く逃る程に勢田の橋に懸ぬ可逃得き樣不思らさりけれは馬より踊下て馬をい弃て橋の下面の柱の許に隱居ぬ觀音助け給へと念して曲り居たる程に鬼來ぬ橋の上ゝして極て怖し氣なる音を舉て何侍々々と度々呼けれは極く隱得たりと思て居たる下に候ふと答へて出來る者有り其も聞けれは何物とも不見えす

産女行南山科値鬼逃語第十五

今昔或る所に宮仕しける若き女有けり父母類親も无く聊に知たる人も无けれは立寄る所も无くて只局にのみ居て若し病なとせむ時に何ゝ爲むと心細く思けるに指る夫も无くて懷妊しにけり然れは彌よ身の宿世被押量て心一ッに歎けるに先つ産まむ所を思ふに可爲き方无く可云合き人も无し主に申さむと思も耻らしくて不申出す而ゝ此の女心賢き者にて思得たりける樣只我れ其の氣色有らむ時に只獨り仕ふ女の童を具して何方とも无く深き山の有らむ方に行て何ならむ木の下にても産まむと若し死なは人にも不被知て止なむ若し生たらは然氣无き樣にて返り參らむと思て月漸く近く成まゝには

悲き事云はむ方无く思けれとも然氣无く持成して密に搆て可食き物なと少し儲て此の女の童に此の由を云ひ含て過けるに既に月滿ぬ而る間曉方に其の氣色思えけれは夜の不曉ぬ前と思て女の童に物共拈め持せて忿き出ぬ東こそ山も近かめれと思て京を出て東様に行かむと爲るに川原の程にて夜曉ぬ哀れ何ち行かむと心細けれとも念して打息みみみ粟田山の方様に行て山深く入ぬ可然き所々を見行けるに北山科と云ふ所に行ぬ見れは山の片副に山庄乃様に造たる所有り舊く壞れ損たる屋有り見るに人住たる氣色无し此にて産して我か身獨りは出なむと思て搆て垣の有けるを超て入ぬ放出の間に板敷所々に朽殘るに上て突居て息む程に奥の方より人來る音とす穴侘しく人の有ける所をと思ふに遣戸の有るを開くるを見れは老たる女の

白髪生たる出來たり定めて半无く云はむすらむと思ふに不慥す打咲て何人の此は不思懸す御たるそと云へは女有のまゝに泣々く語けれゝ嫗糸哀なる事かな只此にて産し給へと云て内に呼入るれゝ女喜き事无限し佛の助け給ふ也けりと思て入たれは賤の疊なと敷て取せたれは程も无く平かに産つ嫗來て喜ひ事也已ゝ年の無老て此る片田舎に侍る身なれは物忌もし不侍す七日許ゝ此て御して返り給へと云て湯なと此の女の童に涌させて浴しなと爲れゝ女喜く思て弃てむと思つる子も糸嚴氣なる男子にて有れは否不弃すして乳打呑せ寄臥せたり此て二三日許有る程に女晝寢そして有けるに此の子を臥せたるを此の嫗打見て云ける様穴甘氣只一口と云と髴に聞て後驚て此の嫗を見るに極く氣怖しく思ゆ然れゝ此れゝ鬼にこそ有けれ我れは必

す被嗽なむと思て密に構て逃なむと思ふ心付ぬ而る間或る時に嫗の晝寢久しくしたりける程に密に子をは女の童ゝ負せて我れは輕ひやかにして佛助け給へと念して其を出て來し道のまゝに走りに走て逃けれは程も无く粟田口に出にけり其より川原樣に行て人の小家に立入て其にて衣なと着直してなむ日暮して主の許にい行たりける心賢き者也けれい此も爲るそかし子をは人に取せて養せてけり其の後其の女嫗の有樣を不知す忽人ゝ此る事なむ有しと語る事も无かりけり然て其れ女の年なを老て後に語ける也此れを思ふに然る舊き所には必す物の住にを有ける然れは彼の嫗も子を穴甘氣只一口と云けるは定めて鬼なとにてこそは有けめ此れに依て然樣ならむ所には獨りなとも不立入ましき事也となむ語り傳へたるとや

正親太夫□□若時値鬼語第十六

今昔正親の太夫□の□□と云ふ者有き其れか若かりける時ゝ可然き所に宮仕しける女を語ひて時々物云けるに久く不行さりけれは云ひ傳たりける女の許に行て今夜彼人に會はむと云けれは女呼奉らむ事は安けれとも今夜此宿に年來知たる田舍人の來て宿て候へは可御き所の不候ぬか侘しき也と云へい虛言を云ふにや有らむと思て寄て見るゝ現ゝ馬下人なと程も无き小家なれは數有れは隱れ所无く實也けりと思ふに此の女暫思ひ廻を氣色ゝて可爲ち樣候けりと云へは何ゝと問ふに女此の西の方ゝ人も无き堂候ふ今夜許其の堂に御をせと云て近ち程也けれは女走て行ぬ暫許待つに女を搔具して來ゝたり去來させ給へと云へは打具して行くに西樣に一町餘許行ゝ舊き堂有り

女堂の戸を引開て已が家の疊一帖を取持來敷て預けて今曉に參らむと云て女返り去ぬ然れは正親の太夫女と臥して物語なと爲る程に共に具したる從者も无くて只獨にて人も无き舊堂なれは氣六借き程に夜中許にも成やしぬらんと思ふ程に堂の後の方に火の光り出來たり人の有けるにこそと思ふ程に女の童一人火を燈して持來て佛の御前と思しき所に居えつ正親の太夫此は極き態かなと六借く思ふに後の方より女房獨り出來たり怪く此れを見るに怖しく思ゆれは何なる事にかと怪むて正親の太夫起居て見れは女房一間許去て喬見て居ぬ暫許有て云く此には何なる人の入御したるそ糸奇怪なる事也丸は此の主也何てか主にも不云して此は來れる此には古より人來り宿る事无しと此く云ふ氣色實をに云はむ方なく怖しく正親の太夫か云く已れ更に人の御ましましける所を不知給に只人の今夜許此に有れと申つれは詣來たる也尤も便无く候ふと女房の云く速に疾く出給ひね不出給は惡かりなむと然れと正親の太夫女を引立てゝ出むと爲るに女汗水に成て否不立ぬを强に引立て出ぬ男の肩に引懸て行けれとも否不歩ぬを搆て主の家の門に將行て門を叩て女をと入れつ正親の太夫は家に返ぬ此の事を思ひ出るに頭毛太りて心地も惡く思えけれは次の日も終日に臥して夕方に成て尙夜前彼の女の否不歩さりしか不審さに彼の云ひ傳ふる女の家に行て聞けは女の云く其の人は返り給けるより物も不思えす只死に死ぬる樣に見けれは何なる事の有つるそなと人々被問けれとも物をたに否不宣さりけれは主も驚き騷て知る人も无き人にて有れは假屋を造て被出たりけれは程も无く死

給ひにけりと云ふを聞くに正親の太夫奇異くて實には夜前然々の事の有し也鬼の住ける所に人を臥せて奇異かりける者かなと云けれは女更に其に然る事有らむと不知ぬ由をそ答けれとも甲斐无くて止にけり正親の太夫か年老て人に語けるを聞傳へたるなるへし其の堂は于今有とかや七條大宮の邊に有とそ聞く委く不知す然れは人无からむ舊堂なとには不宿ましき也となむ語り傳へたるとや

東人宿川原院被取吸妻語第十七

今昔東の方より榮爵尋て買はむと思て京に上たる者有けそ其の妻も此る次てに京をも見むと云て夫に具して上たりけるに宿所の違て无りけれは忽に可行宿き所无くて川原の院の人も无かりけるを事の縁有て其の預の者に語ひて借けれは借してけれは隱れの方の放出の間に幕なと云ふ物を引廻して主は居ぬ從者共は土ある所に居て食物なとをもせさせ馬共をも繫せて日來有ける程に夕暮方に其の居たりける後の方に有ける妻戸を搔に内より押開けれは内に人の有て開るなめりと思ふ程に何をも不思えぬ物の急ぎ手を指出て此の宿たる妻を取て妻戸の内に引入つれは夫驚き騷て引留めむと爲れとも程も无く引入つれは忽寄て妻戸を引開けむと引けとも程无く閉つれは不開す成ぬ然れは傍なる簾す遣戸なをを此引き彼引き爲れとも皆内より懸たれは開かむやは夫奇異く口て此方へ走り彼方へ走り東西南北を引とも不開ねは傍なる人の家に走寄て只今然々の事なむ有る此れ助けよと云へは人共數出來て廻々る見れとも開たる所无し而る間夜に入て暗く成ぬ然れは思ひ繰て鎗を持て切開て火を燃し

て内に入て求めければ其妻を何にしたるにか有けむ疵も无くて□□
として掉の有けるに打懸てゐむ殺して置たりける鬼の吸殺てけるな
めりとそ人々口々に云ひ合たりけれとも甲斐无て止にけり妻死にけ
れは男も怖れて逃て外ゝ行にけり此る希有の事なむ有る然れは案
内不知さらむ舊き所にも不可宿すとなむ語り傳へたるとや

鬼現板來人家殺人語第十八

今昔或る人の許に夏比若き侍の兵立たる二人南面の放出の間ゝ居て
宿直しけるに此の二人本より心もせ有り□也ける田舍人共にて大刀
なと持て不寢て物語なとして有けるゝ程其家ゝ所得たりける長侍の
諸司の允五位なとにて有けるにや上宿直にて出居ゝ獨り寢たりけ
るか然樣の□なる方も无かりけれは大刀を不具けるに此の放出の
間に居たる二人の侍夜打ち深更る程に見けれは東の臺の棟の上に俄
に板れ指出たをけれは彼れと何そ彼に只今板の可指出ゝ樣こそ无け
れ若し人なとの火付けむと思て屋の上に登らむと爲るにや然らは下
よりこそ板を立て可登きに此れは上より板の指出たる不心得ぬ事か
なと二人して忍やかに云ふ程に此の板漸く只指出に指出て七八尺許
指出ぬ奇異と見る程ゝ此の板俄にひち〳〵と飛て此の二人の侍の居
たる方樣に來る然れは此れハ鬼也けりと思て二人の侍太刀を拔て近
く來ハ切らむと思て各突跪て大刀を取直して居たりけれハ其へハ否
不來すして傍なる簾子の迫の塵許有けるより此の板こそ〳〵として
入ぬ此く入ぬと見る程に其の内ハ出居乃方なれハ彼の寢たりつる五
位侍物に被壓たる人の樣ゝ二三度許うめきて久音も不爲さりけれは

此の侍共驚き騒て走り廻て人を起して然々の事なむ有ける（ツメ）と告けれは其の時人々起て火を燃して寄て見けれは其の五位侍をこそ眞平に□殺して置たりけり板外へ出とも不見えす内にも不見さりけ（る）人々皆此れを見て恐ち怖るゝ事无限し五位をは即ち掻出にけり此れを思ふに此の二人の侍ゝ大刀を持て切らむとしけれは否不寄て内に入て刀も不持す緩て寝入たる五位を□殺してけるにこそは有らめ其れより後にや其の家に此る鬼有けりとは知けむ然本より然る所にて有けるにや委く不知す然れは男と成なむ者は尚大刀刀は身に可具き物也此れに依て其の時の人皆此れ事を聞て大刀刀を具しけりとなむ語り傳へたるとや

鬼現油瓶形殺人語第十九

今昔小野の宮の右大臣と申ける人御けり御名をゝ實資とそ申ける身の才微妙く心賢く御けれは世の人賢人の右の大臣とそ名付たりし其の人内に参て能出とて大宮を下に御けるに車の前に小さき油瓶の踊つゝ行けれは大臣此を見て糸怪き事かな此ゝ何物ゝか有らむ此ゝ物の氣なとにこそ有めれと思給て御けるに大宮よりは西□よりた□に有ける人の家の門ゝ被閉たりけるゝ此の油瓶其の門の許とに踊り至て戸は閉たれは鎰の穴の有より入らむ入らむと度々踊り上りけるに无期ゝ否踊り上り不得て有ける程に遂に踊り上り付て鎰の穴よ（り）入にけり大臣は此く見置て返り給て後ゝ人を教へて其々ゝ有つる家に行て然氣无くて其家ゝ何事か有ると聞て返れをて遣たりけれは使行て即ち返り來て云く彼の家ゝは若き娘の候けるゝ日來煩て此の

書方既に失候にけりと云けれは大臣有つる油瓶は然れはこそ物の氣にて有ける也けり其れ也鎰の穴より入けれ（ヌケ）ハ殺してける也けりとそ思給ける其れを見給けむ大臣糸只人には不御さりけり然れは此る物の氣ハ様々の物の形を現して有る也けり此れを思ふに怨を恨けるにこそハ有らめ此なむ語り傳へたるとや

近江國女生霊（無）來京殺人語第二十

今昔京より美濃尾張の程に下らむと爲る下臈有けり京をは曉よ出と思けれとも夜深く起て行ける程に□□と□□との辻にて大路に青はみたる衣着たる女房の裾取たるか只獨り立たりけれは男何たる女の立てるにか有らむ只今定めてよも獨りは不立ー男具したらむと思て歩き過ける程に此の女男に云く彼の御する人は何ち御する人そと問へは男美濃尾張の方へ罷下る也と答ふ女の云く然ては忿き給らむ然ハ有れとも大切に可申き事の侍る也暫し立ち留り給へと男何事にか候らんと云て立留たれハ女乃云く此の邊に民部の大夫の□□と云ふ人の家ハ何こに侍るそ其へ行かむと思ふに道を迷ひて否不行ぬと丸を其へハ將御なむやと男其の人の家へ御せむにハ何の故に此に御つるそ其の家ハ此より七八町許罷てこそ有れ但し忿て物へ罷そに其まて送り奉らハ大事にこそハ候はめと云へハ女尚極て大切の事也只具して御せと云へハ男是非（ナマシヒニガ）なく具して行くに女糸喜しと云て行けるゝ恠く此の女の氣怖しき様に思ふけれとも只有る事にこそはと思て此く云ふ民部の大夫の家の門まて送り付つれハ男此れを其い人の家の門と云へハ女此く忿て物へ御する人の態と返て此まて送を付

け給へる事返々す喜くなむ自ハ近江國□□の郡ニ其々に有る然々と云ふ人の娘也東の方へ御せハ其の道近き所也必す音つれ給へ極て不審き事の有つれハなむと云て前ニ立たりと見つる女の俄に掻消つ様に失ぬ男奇異き態かな門の開たらハこそハ門の内に入ぬるとも可思きニ門ハ被閉たり此ハ何ニと頭の毛太りて怖しけれハ痩たる様にて立てる程に此の家の内に俄に泣喧る音有り何なる事ニかと聞ハ人の死たる氣はひ也希有の事かなと思て暫く徘徊ふ程に夜も曉ねれハ此の事の不審しを尋ねむと思て曉畢て後に其の家の内に髴知たる人の有けるに尋ね會て有様を問けれハ其の人の云く近江の國に御する女房の生靈に入給ひたるとて此の殿の日來不例す煩ひ給つるか此の曉方に其生靈現たる氣色有なと云つる程に俄に失給ぬる也然は此く新たに人をハ取り殺せ物ニこそ有けれと語るを聞くニ此男も生頭痛く成て女ハ喜ひつれとも其れか氣の爲るなめりを思て其の日ハ留まりて家に返にけり其の後三日許有てそ下げるニ彼の女の教へも程を過けるに男夫來彼の女の云し事尋て試むと思て尋けれハ實に然る家有けり寄て人を以て然々と云ひ入させたりけれハ然る事有ものとて呼入れて簾超しに會て有し夜の喜ひハ何れの世にか忘れ聞えむなと云て物なと食はせて絹布なと取せたりけれは男極く怖しく思けれとも物なと得て出て下にけり此れを思ふに然ハ生靈と云ハ只魂の入て爲る事かと思ハるニ早ク現に我れも思ゆる事にて有にこそ此ハ彼の民部の大夫か妻ニ一たをけるか去にけれは恨を成して生靈に成て殺てける也然れハ女の心ハ怖ーき者也となむ語り傳へたるとや

美濃國紀遠助値女靈遂死語第廿一

今昔長門の前司藤原の孝範と云ふ者有き其れか下總の權の守と云ひし時ふ關白殿に候ひし者にて美濃の國に有る生津の御庄と云ふ所を預りて知けるに其御庄に紀の遠助と云ふ者有き人數有ける中に孝範此の遠助を仕ひ付て東三條殿の長宿直ふ召上たりけるか其宿直畢にけれは暇取せて返し遣けれ美濃へ下けるに勢田の橋を渡る に橋の上に女の裾取たるか立てりけれは遠助怪しと見て過る程に女の云く彼れ何ち御する人そと然れ遠助馬より下て美濃へ罷る人也と答ふ女事付申さむと思ふは聞給ひてむやと云けれは遠助申し侍りなむと答ふ女糸喜く宣ひたりと云て懐より小さき箱の絹を以て裹たるを引出して此箱方縣の郡の唐の郷の收の橋の許ふ持御したら

收一本作吸或作吸

ん橋の西の爪に女房御せむとすらむ其の女房に此れ奉り給へと云へん遠助氣六借く思ゑて由无に事請をしてけると思へとも女の樣の氣怖しく思へけれ難辭くて箱を受取て遠助か云く其の橋の許に御すらむ女房をん誰とか問ん何くふ御する人そ若し不御會すん何くをか可尋奉き多此れをん誰か奉給ふとか可申きと女の云く只其の橋の許に御たらん此れと受取りに其の女房出來なむよに違ふ事不侍し待給ふらむそ但し穴賢努々此箱開て不見給なと此樣ふ云立りけるを此の遠助か共なる從者共ん女有とも不見す只我か主ん馬より下て由无くて立けるをと見て怪しひ思けるに遠助箱を受取つれん女ん迄ぬ其の後馬に乘て行くに美濃に下着て此の橋の許を忘れて過にけれん此の箱を不取せさりけれは家に行着て思出して糸不便也ける此の箱を

不取りけると思て今故に持行て尋て取せむとて壺屋立たる所の物の上に捧て置ありけるを遠助が妻い嫉妬の心極く深かりける者にて此の箱を遠助が置けるを妻然氣无くて見て此の箱をい女に取せむとて京より態と買持來て我れに隠して置たるなめりと心得て遠助が出たる間に妻密に箱を取下して開て見ければ人の目を抉て數入れたり怎男の閑を毛少し付けつゝ多く切入れたを妻此れを見て奇異く怖しく成て遠助が返り來たるに迷ひ呼寄せて見すれは遠助哀れ不見ぬ〻と云ふし物を不使なる態かなと云て迷ひ覆ひて本の樣に結てやかて即ち彼の女の教へし橋の許に持行て立てりけれは實に女房出來たり遠助此の箱を渡して女の云ふ事を語れい女房箱を受取て云く此の箱い開て被見にけりと遠助更に然る事不候すと云へとも女房の氣色糸惡氣にて糸惡しくゝ給ふかなと云て極て瞋めて（三字無ヶ）氣色惡乍ら箱をい受取つれい遠助い家に返ぬ其の後遠助心地不例すと云て臥しぬ妻に云く然許不開ぬしと云ふ箱を由无く開き見てとて程无く死ぬけり然れと人の妻嫉妬の心深く虚疑ひせむは夫の爲に此く不盡ぬ事の有る也嫉妬の故に遠助不思懸す非分に命をなむ失ひてけり女の常の習とい云ひ乍ら此れを聞く人皆此の妻を憎みけりをなむ語り傳へたるをや

獵師母成鬼擬噉子語第廿二

今昔□□の國□□の郡に鹿猪を殺すを役と爲る者兄弟二人有けり常に山に行て鹿を射けれい兄弟搔列て山に行にけり待を云ふ事をなむしける其れい高き木の胯に横樣に木を結て其れに居て鹿の來て其の

下に有るを待て射る也けり然れは四五段許を隔て兄弟向様に木の上に居たり九月の下つ暗の比なれは極て暗くして何にも物不見えす只鹿の來る音を聞むと待つに漸く夜深更るに鹿不來す而る間兄ゥ居たる木の上より物の手を指下して兄ゥ髻を取て上様に引上れは兄奇異と思て髻取たる手を搜れは吉く枯れて曝ろひたる人の手にて有を此れは鬼の我れを噉はむとて取て引上るにこそ有めれと思て向ュ居たる弟に告けむと思て弟を呼へは答ふ兄ゥ云く只今若ー我ゥ髻を取て上様に引上る者有らむュ何にしてむと弟の云く然ュ押量て射そゥーと兄ゥ云く實には只今我ゥ髻を物の取て上へ引上る也と弟然らは音に就て射むと云へュ兄然らは射よと云ふに隨て弟鴈胯を以て射たりけれは兄ゥ頭の上懸ると思ゆる程に尻答ふる心地すれ

は弟寄ぬるにこそ有めれと云ふ時ュ兄手を以て髻の上を搜れは腕の頸より取たる手被射切て下たれは兄此れを取て弟に云く取たりつる手は既に被射切て有れは此に取たり去來今夜は返あむと云へュ弟然也と云て二人乍ら木より下て搔列て家に返ぬ夜半打過てそ返着たりける而るに年老る立居も不安ぬ母の有けるを一ッの壺屋に置て子二人は家を衞別けて居たりけるゥ此の子共の山より返來たるに怪く母の吟けれは子共何と吟給ふそと問へとも答へも不爲す其の時に火を燃して此の被射切たる手を二人して見るに此の母の手に似たり極ーく怪み思て吉く見るに只其の手にて有れは子共母の居たる所の遣戸を引開たれは母起上て己等はと云て取懸むとすれは子共此れハ御手ゥと云て投入れて引閉て去にけり其の後其の母幾く程无くし

て死にけり子共寄て見れは母の片手々の頸より被射切て无し然れい早う此の母の手也けりと云ふ事を知ぬ此れい母かゝ痛う老耄て鬼に成て子を食むとして付て山に行たるける也けり然れは人の祖の年痛う老たるは必す鬼に成て此く子をも食むとする也けり母をは子共葬してけり此の事を思ふに極て怖しき事也となむ語り傳へたるとや

播摩國鬼來人家被射語第廿三

今昔播摩の國□□の郡に住ける人の死にたりけるに其の後の拈なと爲させむとて陰陽師を呼籠たるけるに其の陰陽師の云く今某日此の家に鬼來らむとす努々可愼給ーと家の者共此の事を聞て極く恐ち怖れて陰陽師に其れをは何かゝ可爲きと云へい陰陽師其の日物忌を吉く可爲き也と云ふに既に其の日は成ぬれは極く物忌を固くして其の鬼は何より何なる體にて可來なりと陰陽師に問げれい陰陽師門より人の體にて可來ー然樣の鬼神い横樣の非道の道をい不行ぬ也只直ー に道理の道を行く也と云へい門に物忌の札を立て桃の木を切塞さて □法をしたり而る間其の可來しと云ふ時を待て門を強く閉て物の迫より臨は藍摺の水干袴着たる男の笠を頸に懸たる門の外に立て臨く陰陽師有て彼を鬼と云へい家の内の者共恐ち迷ふ事无限ー此の鬼の男暫く臨き立て何ゝして入るをも不見えて入ぬ然て家の内に入來て竈戸の前に居たり更に見知たる者に非す然れは家の内の者共今は此にこそは有けれ何樣なる事か有らむとすらむと肝心も失て思ひ合たる程に其の家主の子ゝ若き男の有けるか思ふ樣今こ何にすとも此の鬼に被喰なむとす同死にを後に人も聞けかー此の鬼射むと思て

物い隱より大なる□鴈箭を弓に番て鬼に指宛てゝ強く引て射たりけれゝ鬼の最中に當りけり鬼ゝ被射るまゝに立走て出つゝ思ふ程に搔削つ樣に失にけり箭は不立すして踊返にけゝ家の者皆此れを見て奇異き態しつる主かなゝを云ければ男同し死にを後ゝ人の聞かむ事も有りと思て試つる也と云けれゝ陰陽師も奇異の氣色してあむ有ける其の後其の家に別の事无かりけり然れは陰陽師の構たる事にや有らむと可思きに門より入けむ有樣より始めて箭の踊返て不立さりけむ事を思ふに只物には非さりけりと思ゆる也鬼の現はに此く人と現して見ゆる事は難有く怖しき事也かしとなむ語り傳へたるとや

人妻死後成本形會舊夫語第廿四

今昔京に有ける生侍年來身貧くして世に有付く方も无かりける程ゝ不思懸す□の□と知たる人□の國の守に成にけり彼の侍年來此の守を相知たりけれゝ守の許に行さりけれゝ守の云く此て京ゝ有付く方も无くて有よりは我か任國に將行て聊かの事をも顧む年來も糸惜と思つれとも我れも不叶ぬ身ゝて過つるに此て任國に下れは具むと思ふゝ何にと侍糸喜き事に候ふ也と云て既に下らむと爲る程に侍年來棲ける妻の有けるか不合ゝ難堪かりけれとも年も若く形ち有樣も宜く心樣なとも勞たかりけれも身の貧さをも不顧すして互に難去く思ひ渡けるに男遠き國へ下なむと爲るに此の妻を去て忽に便り有る他の妻を儲てけり其の妻萬の事を繚て出し立けれゝ其妻を具して國に下にけり國に有ける間事に觸て便り付にけり此て思ふ樣にて過し

ける程に此の京に弃て下りよし本の妻の破无く戀しく成て俄に見ま欲く思えげれゝ疾く上て彼れを見はや何にしてか有らむと肝身を剝く如く也けれは萬つ心すこくて過ける程に墓无く月日も過て任も畢ぬれは守の上ける共に侍も上ぬ我れ由无く本の妻を去けり京に返り上らむまゝにやかて行て棲むと思ひ取てけれは上るや遲きと妻をゝ家に遣て男ゝ旅装束乍ら彼の本の妻の許に行ぬ家の門ゝ開たれゝ這入て見れは有〻様にも无く家も奇異く荒て人住たる氣色も无し此を見るよ彌よ物哀れにて心細き事无限し九月の中の十日許の事なれゝ月も極く明し夜冷にて哀れに心苦〻き程也家の内に入て見れゝ居たり〻所に妻獨り居たり夕人无し妻男を見て恨えたる氣色も无く喜氣に思へる樣にて此ゝ何かて御しつるそ何つ上り給たるをと云へゝ男國にて年來思つる事共を云て今ゝ此て棲む國より持上たる物共も今明日取り寄せむ從者なとをも呼はむ今夜ゝ只此の由許を申さむとて參つる也と云へゝ妻喜と思たる氣色にて年來の物語なとして夜も深更ぬれゝ今ゝ去來寢なむとて南面の方に行て二人搔抱て臥しぬ男此にゝ人ゝ无きかと問へゝ女破无き有樣にて過つれゝ被仕る者も无しと云て長き夜よ終夜語ふ程よ例よりゝ身に染む樣に哀れに思ゆ此る程に曉よ成ぬれゝ共に寢入ぬ夜の明らむも不知て寢たる程に夜も明て日も出よけり夜前人も无しゝゝ蔀の本をゝ立て上をは不下さりけるに日の鑭々と指入たるに男打驚て見れは搔抱て寢たる人ゝ枯々と〻て骨と皮と許なる死人也けり此ゝ何にと思て奇異く怖〻き事云むむ方无けれゝ衣を搔抱て起走て下に踊下て若し

僻目かと見れども實に死人也其の時に忿て水干袴を着て走出て隣なる小家に立入て今始めて尋ぬる樣にて此の隣なる一人の何こに侍こと聞給ふ其家より人も无きかと問げれは其家の人の云く其の人の年來の男の去て遠國に下にしかい其れを思ひ入て歎き一程に病付て有一を繚ふ人も无くて此の夏失よりを取て弃つる人も无れは未た然て有るを恐て寄る人も无くて家い徒にて侍る也と云ふを聞くに彌よ怖しき事无限し然て云甲斐无くて返にけり實より何に怖しかりけむ魂の留て會たるけるにこそはと思ふより年來の思ひに不堪して必す嫁てむかし此る希有の事なむ有ける然れは然樣なる事の有らむを い尚尋て可行き也となむ語り傳たるとや

女見死夫來語第廿五

今昔大和の國□□の郡より住む人有けり一人の娘有り形美麗にして心勞たかりけれい父母此れを傳へけり名河内の國□□の郡に住む人有けり一人の男子有けるを年若くして形ち美かりけれい京に上て宮仕して笛をそ吉く吹ける心はへなとも可咲かりけれい父母此れを愛しけり而る間彼の大和の國の人の娘形ち有樣美麗なる由を傳へ聞て消息を遣る懇に假借しけれとも曹くい不聞入さりけるを强に云けれい遂に父母此れを會せてけり其後无限く相思て棲ける程に三年許有て此の夫不思懸身に病を受て日來煩ける程に遂に失にけり女此れを歎き悲むて戀ひ迷ひける程に其の國の人數消息を遣て假借しけれとも聞きも不入れすして尚死たる夫をのみ戀ひ泣き年來を經るに三年と云ふ秋女常よりも涙に溺れて泣き臥たりけるに夜半許より笛を吹く

音の遠く聞ゑけれゝ哀れ昔の人に似たる物かなと彌よ哀れに思けるに漸く近く來て其の女の居たりけん蔀の許に寄來て此れ開けよと云ふ音只昔の夫の音なれゝ奇異く哀れなる物から怖しくて和ら起て蔀の迫より臨けれゝ男現に有て立てり打泣て此く云ふ

しての山こゑたる人のわひしきいこひしき人にあはぬなりけり

とて立てる樣有し樣なれと怖しかりけり紐をそ解て有ける名身より煙の立けれを女怖しくて物も不云さりけれゝ男理也や極く戀給ふゝ哀れにあれゝ破无き暇を申して參り來たるに此く恐ち給へゝ罷り返なむ日に三度燃る苦をなむ受たると云て搔消つ樣に失にけり然れゝ女此れ夢かなと思けれとも夢にも非さりけれは奇異く思て止にけり此を思ふに人死はたれとも此く現にも見ゆる者也けりとなむ語り傳へたるとや

河内禪師牛爲靈被借語第廿六

今昔播磨の守佐伯の公行を云ふ人有けり其れか子に佐大夫□□とて四條と高倉とに有し者ゝ近來有る顯宗と云ふか父也其の佐大夫ゝ阿波の守に藤原の定成の朝臣か共に阿波に下ける程に其船にて守と共に海に入て死にけり其の佐大夫ゝ河内禪師と云し者の類親にてなむ有ける其の時に其の河内禪師か許に黃斑の牛有けり其の牛を知たる人の借けれゝ淀へ遣けるに□集（ヒツメ字拾）の橋にて牛飼の車を惡く遣て車の片輪を橋より落したりけるに被引る車も橋より落けるを車の落る也けりと思けるにや牛の踏ゝたかりて不動て立てりけれゝ鞅の切れ

る車ハ落て損じにけり牛ハ橋の上に留てそ有ける人も不乘ぬ車なれハ人ハ不損さりけり弊き牛ならましかハ被引て牛も損しなまし

を然れハ極き牛の力々なとそ其の邊の人も讃ける其の後其の牛を勞り飼ける程に何にして失たりとも无くて其の牛失にけり河内禪師此ハ何なる事そとて求め騒げれとも无けれは離れて出ける

とて近くより遠きまて尋ねさせけれ共遂に无けれは求め繚て有る程に河内禪師か夢に彼の失にし佐大夫か來たりけれハ河内禪師海に落入て死にきと聞く者ハ何かて來るにか有らむと夢心地にも怖し

と思々ふ出會たりけれは佐大夫か云く己ハ死て後此の丑寅の角の方になむ侍るか其より日に三度□集の橋の許に行て苦を受侍る也其れに己れか罪の深くて極て身の重く侍れハ乘物の不堪すして歩より罷り行くか極て苦く侍は此の黄斑の御車牛の力の強くて乘り侍るに堪たれは暫く借申して乘て罷行くを極く求めさせ給へハ今五日有て六日と申さむ已の時許に返し申してむとす強に求め騒かせ不給そと云ふと見る程に夢覺ぬ河内禪師此る怪き夢をこそ見つれと人に語て止にけり其の後其の夢に見えて六日と云巳の時許に此の牛俄に何こより來りとも无くて歩ひ入たり此の牛極く大事したる氣にてそ來たりける然れハ彼の□集の橋にて車ハ落入牛ハ留をけむを彼の佐大夫か霊の其の時に行會て力強き牛々なと見て借て乘り行けるにや有けむ此ハ河内禪師か語をし也此れ極めて怖しき事と也こなむ語り傳へたるをや

白井君銀提入井被取語第廿七

今昔世に白井の君と云ふ僧有き此近くを失にし其れ本は高辻東の洞院に住しかとも後には烏丸よりは東六角よりは北に烏丸面に六角堂の後合せるを住しける其の房に井を堀けるに土を投上たりける音の石に障て金の様に聞えける聞付て白井の君此れを怪むて寄て見けれは銀の鋺にて有けるを取て置てけり其の後に異銀なと加へて小やかなる提に打せてを持たりける而る間備後の守藤原の良貞と云ふ人に此の白井の君は事の縁有て親かりし者にて其備後の守の娘共彼の白井か房に行て髪洗ひ湯浴ける日其の備後の守の半物の此の銀の提を持て彼の鋺堀出したる井に行て其れ提を井の筒に居ゑて水汲む女に水を入させける程に取はつして此の提を井に落し入れてけり其の落し入るをはやかて白井の君も見けれは即ち人を呼て彼れ取上よと云て井に下して見せけるに現に不見えさりけれは沈にけるなめりと思て人を數井に下して捜せけるに无りけれは驚き怪むて忽に人を集めて水を汲干して見けれとも无し遂に失畢にけり此れを人の云けるは本の鋺の主の霊にて取返してけるなめりとそ云ける然れと由无き鋺と見付て異銀さへを加へる被取はける事こそ損なれ此れと思ふに定めて霊の取返したると思ふか極て怖しき也此くなむ語り傳へたるとや

於京極殿有詠古歌語第廿八

今昔上東門院の京極殿に住せ給ける時三月の廿日餘の比花の盛にて南面の櫻艶す榮乱したりけるに院寢殿にて聞かせ給せけれは南面の日隠しの間の程に極しく氣高く神さひたる音を以てこほれてに

ほふ花さくらかなと長めけれは其の音を院聞かせ給ひて此は何なる人の有るそと思ひ食て御障子の被上たりけれは御簾の内より御覧しけるに何とも人の氣色も无かりけれは此は何かに誰か云つる事そとて數の人を召て見せさせ給けるに近くも遠くも人不候すと申けれは其の時に驚かせ給て此は何ゝに鬼神なとの云ける事かと恐ち怖れさせ給て關白殿は□□殿と御まーけるに念て此る事こそ候ひつれと申させ給ひたりけれは殿の御返事に其れは其の□にて常に然樣に長め候ふ也とそ御返事有ける然れは院彌よ恐ちさせ給て此れは人の花を見て興に為る然樣に長めたりけるを此く密く尋ねさすれは怖れて逃け去ぬるこそ有めれとこそ思ひたるとこの□にて有けれは極く怖しき事也となむ被仰ける然れは其の後は彌よ恐ちさせ給ひて近くも不御さりけり此れを思ふに此れは狐なとの云たる事とは非ー物の霊なとの此の歌を微妙き歌かなと思ひ初てけるかは花を見る毎に常と此く長めけるなめりとそ人疑ひける然樣の物の霊なとは夜るなとこそ現にる事とて有れ貴日中に音を擧て長めけむ實に可怖ク事也かー何なる霊と云ふ事遂に不聞えて止にけりとなむ語り傳へたるとや

雅通中將家在同形乳母二人語第廿九

今昔源の雅通の中將と云ふ人有き丹波中將となむ云ひし其の家は四條よりは南室町よりも西也彼の中將其の家に住ける時に二歳許の兒を乳母抱て南面也ける所に只獨り離れ居て兒を遊はせける程に俄と兒の愕たゝしく泣けるに乳母も嘘る音のしけれは中將は北面に居た

りけるが此れを聞て何事とも不知らで大刀を提て走り行て見けれは同形なる乳母二人が中に此の兒を置て左右の手足を取て引しろふ中將奇異く思て吉く守れゝ共に同乳母の形にて有り何れか實の乳母ならむと云ふ事と不知す然れゝ一人ゝ定めて狐なとにこそは有らめと思て大刀をひらめかして走り懸ける時に一人の乳母搔消つ樣に失ぬけり其の時に兒も乳母も死たる樣にて臥たりけれゝ中將人共を呼て驗有る僧なと呼はせて加持せさせなとしけれゝ暫許有て乳母例心地ぬ成て起上たりけるに中將何なりつる事そと問ひけれは乳母の云く、若君を遊はかし奉つる程に奥の方より不知ぬ女房の俄に出來て兒は我が子也と云て奪取つれと不被奪しと引しろひつるぬ殿の御まして大刀をひらめかして走り懸らせ給ひつる時になむ若君も打奔て其の女房奥樣へ罷たると云けれゝ中將極く恐けり然れは人離れたらむ所にゝ幼き兒共をゝ不遊ましき事也となむ人云ける狐れ□たりけるにや怪物の靈にや有けむ知る事无くて止にけりとなむ語り傳へたるとや

幼兒爲護枕上蒔米付血語第三十

今昔或る人方違へに下京邊也ける所に行たりけるに幼き兒を具したりけるに其の家に本より靈有けるを不知て旨寢にけり其の兒の枕上に火を近く燃して傍に人二三人許寢たりけるに乳母目を悟して兒に乳を含めて寢たる樣にて見けれゝ夜半許ぬ塗籠の戸を細目に開て其より長五寸許なる男五位共の日の裝束したるゝ馬に乘て十人許次きて枕上より渡けるを此の乳母怖しと思ひ乍ら打蒔の米を多らかに搔

現存堂版

歐て打投たりけれゝ此の渡る者共と散て失にけり其の後彌よ怖しく思ける程に夜曉にけれは其枕上を見けれは其の投たる打詩の米毎に血なむ付たりける日來其の家に有らむと思けれとも此の事を恐て返にけり然れは幼く兒共の邊よは必す打詩を可置き事也とそ此れを聞く人皆云ける炙乳母の心の賢くて打詩をはしたる也とそ人乳母を讃ける此れを思ふに不知さらむ所にも廣量して不可行宿す世よも此る所も有る也となむ語り傳へたるとや

三善清行宰相家渡語第卅一

今昔宰相三善の清行と云ふ人有けり世に善宰相と云ふ此れ也淨藏大德の父也萬の事を知て止事无かりける人也陰陽の方をさへ極めたりけり而る間五條堀川の邊に荒たる舊家有けり惡き家也とて人不住を して久く成にけり善宰相家无かりけれゝ此の家を買取て吉き日を以て渡らむとしけるを親き族此の由を聞て强に惡き家に渡らむと爲る極て益无き事也とて制しけれとも善宰相不聞入すして十月の廿日の程に吉き日を取て渡けるに例の家渡の樣にゝ无くて酉の時許に宰相車に乘て疊一牧許を持せて其家に行にけり行着て見れは五間の寢殿有り屋の體立けむ世を不知も庭に大きなる松鶏冠木櫻ときは木なと生たり木共も皆久く成て樹神も住ぬへし紅葉をる絡石這懸れり庭は苔地にて掃けむ世も不知す宰相寢殿に上て中の橋隱の間を上させて見れは障子破懸りて皆損したり放出の方の板敷を拭せて持せたりつる疊を中の間に敷て火を燃させて其の疊に宰相南向に居て車ゝ車宿に引入させて雜色牛飼なとをは明旦參れと云て返し遣りつ宰相只一

人南向に眠り居たるに夜半ばかり成ぬらむと思ふ程に天井の組入の上に物けこそめくを見上たれは組入の子毎に顔有り其顔毎に替れり宰相其れを見れとも不騒すして居たれい其の顔皆失ぬ然暫許有て見れい南の庇の板敷より長一尺許なる者共馬に乗次きて西より東様に四五十人許に渡る宰相其れを見れとも不騒にして居たり然暫許有て見れは塗籠の戸を三尺許引開て女居さり出つ居長三尺許の女の檜皮色の衣を着たり髪の肩ばかりに懸りたる程極く氣高く清氣也匂たる香艶す馥はし麝香の香に染返たり赤色の扇を指隠たる上より出たる額つき白く清氣也額の捻たる程眼尻長やかに打引たるに尻目に見遣せたる煩はしく氣高し鼻口なと何ばかり微妙らむと思ゆ宰相白地目もせす守れは暫許居て居さを返るとて扇を去たる見れい鼻鮮にて匂ひ赤し口耳無脇まて二タ四五寸許三字無メきれて銀を作たる牙咋違たり奇異き者かなと見る程に塗籠ばかりに入て戸を閉つ宰相其れにも不騒にして居たるに有明の月の極て明きに木暗き庭より淺黄上下着たる翁の平に□搔たる文挾ばかり文を指て目の上ばかり捧て平みて橋の許に寄來て跪て居たり其の時に宰相音を擧て何事申す翁をと問へは翁□き□枯れ小き音を以て申さく年來住候つる所を此く令居給へは大きなる歎きと思給て愁申さむかゝ爲に參て候ふ也と其の時に宰相仰せて云く汝か愁へ頗る不當す其の故い人の家を領する事い次第に傳へて得る事也而るを汝ち人の傳へて可居き所を人を愕やかして不令住すして押居て領□る極て非道也實の鬼神と云ふ者は道理を知て不曲ねはこそ怖しけれ汝い必す天の責蒙なむとす此れは他ばかり非に老狐の居て人を愕やかす也鷹犬一つたに

有らは皆昨殺させてむ物を其の理慥に申せと其の時に翁申さく仰せ給ふ事尤も可遁き所无し只昔より住付て候ふ所なれは其の由を申す也人を愕やかし候ふ事は翁か所爲に非す一両候ふ小童部の制し宣へ候へとも制止にも不憚すして自ら仕る事にや候ふらむ今い此て御まさは何か可仕き世間い隙无く候へと可罷き所不候す只大學の南の門の東の脇なむ徒なる地候ふ許されを蒙て其の所へ罷り渡らむは何ゝと宰相仰せて云此れ極て賢き事也速に一孫引き列れて其の所へ可渡しと其の時に翁音を高くして答へて爲るに付て四五十人許の音なむ散と答へける夜曉ぬれい宰相の家の者共迎へに來ぬれい宰相家に返て其の後よりを此の家を造らせて例の樣にしても渡げる然て住ける間聊に怖しき事无くて止にけり然れは心賢く智有る人の爲には鬼

なれとも惡事も否不發ぬ事也けり思量无く愚なる人の鬼の爲にも被□る也とあむ語り傳へたるとや

民部大夫賴清家女子語第卅二

今昔民部の大夫□□の賴清と云ふ者有けり齋院の年預にてなむ有けるに齋院の勘當を蒙たりけれは其の程木幡と云ふ所に知る所有けれい其に行てなむ有ける而るに賴清か中間に仕ける女有けり名をは參川の御許となむ云ける年來仕けるに其の女京に家有けれは主の賴清も勘當（院ノ宣）にて木幡に入居にけれは其の女暇有て久く京に有ける程に賴清か許より舍人男を遣せて忿き事有り只今參れ日來御ましつる木幡の殿い故の事有て昨日立せ給ひにき山城なる所になむ人の家を借て渡せ給ひたる疾々く參れを云けれは女五つ許なる子をなむ持たりけ

紙は其れを掻抱て忿て行にけり行着て見れは常よりも賴清か妻此の女を取饗應して物なと食せて忿かし氣ゝて何にを无き物染め張り忿きけれゝ女も諸共に忿て四五日に成ゝけり而る間主の女此の女に云く木幡に我か居たりし所には木守に雜色一人をなむ置たる其ゝ行て忍ひて可云き事の有るを行なむやと女承はりぬと云て子をは同僚に預けて出立て行にけり木幡に行着て家の内ゝ入たれは定めて人无く て掻澄てそ有らむと思ふに糸捻ゝーくて有つる所にて只今見つる同僚共も皆有り奇異くて奥に入たれは主も有り夢かと思えて□(テダ)を立れゝ人々の云く穴珍し參河の御許の坐けるは何と久くは參り不給さりつるを殿ゝゝ院の勘當被免給たれは我れにも告申ーに人遣たりしゲは此の二三日は殿へとて不御すを隣の人の云けるとて返來たれは何

こに坐つるそなと云合たれゝ女糸奇異く怖ーく思て有のまゝに然々とわなゝき(淳脫歟)周たる氣色にて云ふと家の内の者共主より始て恐合けるに咲ふ者も有けり女は我ゝ子を置て來ぬるを今ゝ无き者そと思えて物も不思ゐて然は人を遣ゝして見せさせ給へと云けれは人の數具して遣たりけれは女行て有つる所と見けれゝ遙々を有る野ゝ草糸高く生たり人の形无ー胸塞かりて忿て子を求けれは其の子只獨り荻薄(オキタ)の滋たる中に居て哭けれは母喜乍ら子をゝ抱き取て本の木幡に返て然々有つと語けれは主も此きを聞て汝か虛言也とそ云ける同僚共も糸々奇てそ有ける然れとも幼き子を野の中ゝ將行て弃置たらむやは此れそ思ふに狐なとの所爲にこそ有めれ然るにてこそ子を不失さりける事とあむ萬乃人擧て問ひ嘘ける此く奇異き事なむ有けるとな

む語り傳へたるとや

西京人見應天門上光物語第卅三

今昔西の京邊に住む者有けり父は失て年老たる母獨なむ有ける男子二人有けるが兄は人の侍なとにて被仕けり弟は比叡の山の僧にてなむ有ける而る間其母重き病を受て日來煩けれは二人の子皆副て西の京の家に有て繚ける母少し病減氣有けれは弟の僧三條京極の邊に師の有ける所へとて行にけを而る間其の母の病尙發(無キ)て可死く思ゑけれは兄の男は副て有けるに母の云く我れ必す死なむとす此の僧を見て死なはやと兄此れを聞くと云へとも既に夜は成ぬ從者は无し三條京極の邊も遥也何かは可爲からむ明旦こそは呼に遣はさめと云けれは母我れ今夜を可過き心地不思えす彼れを不見で死なは極て口惜かりなむと云て力无く術无氣なる氣色に哭けれは兄然許思給はん(ニテダ)には糸安ぬ事也夜中也とも命を不顧す呼に罷なむと云て箭三筋許を持て只獨り出て內野通に行けるに夜打深更て冬比乃事なれは風打吹て怖しき事无限し暗の比にて何にも物不見えす應天門と會昌門との間を通けるに奇異く怖かりけれとも思ひ念して過ぬ彼の僧の房に行着て弟の僧を尋ぬるに其の僧今朝山へ登にけれは忽程も无く走り返るに初の如く應天門と會昌門との間を通けるに前は度よりも增て怖かりけれは忽て走り過けるに應天門の上の層を見上たれは眞さをに光る物有り暗けれは何物とも不見えぬ程に嘘を類はしてなむかゝと咲けるを頭毛太りて死する心地しけれとも狐はこそは有らめと思ひ念して過て西樣へ行けるに豐樂院は北の野は圓なる物の光る有けり其れをな

（噓丹本噉作る）

む鳴る箭を以て射たをけれと射徹すと見けれと失にけり然てなむ西の京□家に夜半許に返り着たりける其の怖しと思ける氣にや日來温てなむ病ける思ふに何かに奇異く怖しかりけむ然れとも其れは定めて狐なとの所爲にこそは有らめとそ人云けるとなむ語り傳へたるや

被呼姓名射顯野猪語第卅四

今昔□□の國□□の郡に兄弟二人の男住けり兄は本國に有て朝夕に狩するを役とーけり弟は京に上て官仕ーて時々そ本國まゝ來ける而る間其の兄九月の下つ暗の比燈と云ふ事をして大きなる林の當りを過けるに林の中に辛ひたる音の氣色異たるを以て此の燈爲る者の姓名を呼けれは怪と思て馬を押返して其の呼ふ音を弓手樣に成ーて火を焔串に懸て行けれは其の時まは不呼さりけり本の如く女手に成して火を手に取て行く時には必らす呼けり然れゝ搆て此れを射はやと思ひけれとも女手なれは可射き樣も无くて此樣にーつゝ夜來を過ける程に此の事を人にも不語さりけを而る間其の弟京より下たりけるに兄然々の事なん有ると語けれゝ弟糸希有なる事にこそ侍なれ己れ罷て試むと云て燈ーまゝ行にけり彼の林の當りを過けるに其の弟の名をは不呼すして本の兄か名を呼けれは弟其の夜ゝ其の音を聞つる許にて返まけり兄何ゝにそ聞給つやと問けれは弟實に候ひけり但ーえせ者にこそ候ぬれ其の故は實の鬼神ならは己か名こそ可呼きに其御名をこそ尚呼ひ候ひつれ其れを不悟ぬ許の者なれゝ明日の夜罷て必す射顯ーて見せ奉らむと云て其の夜は明ぬ夕の夜夜前の如く

行て火を燃して其を通けるに女手なる時には呼ひ弓手なる時には不呼さりけれは馬より下て鞍を下て馬に逆様に置て逆様に乘て呼ふ者には女手と思はせて我れは弓手に成て火を焔串に懸て箭を番ひ儲て過ける時に女手と思けるにや前の如く兄か名を呼けるを音を押量て射たりけれは尻答へつと思て其の後鞍を例の様に置直して馬に乘て女手にて過けれとも音も不爲さりけれは家に返にけり兄何にかと問けれは弟音に付て射候つれは尻答ふる心地しつ明てこそは當り不當すは行て見むと云て夜明けるまゝに兄弟搔列て行て見けれは林の中に大きなる野猪木に被射付てそ死て有ける此様の者の人謀らむと爲る程に由无き命を亡す也此れ弟の思量の有りて射顯かしたる也とてそ人譖けるとなむ語り傳へたるとや

有光來死人傍野猪被殺語第卅五

今昔□□の國□□の郡に兄弟二人の男有けり共に心猛くして思量有ける而るに其の祖死にけれは棺に入れて蓋を覆て一間有ける離さる所に置て葬送の日の遠かりけれは日來有ける程に自然ら鬚に人の見て云ける様此の死人置たる所の夜半許に光る事なむ有る怪き事也と告けれは兄弟此れを聞て此れと若し死人の物なとに成て光るにや有らむ然ら死人の所に物の來るにや有らむ然らは此れ搆へて見顯かさはやと云合せて弟兄に云く我か音せむ時に火を燃して必す疾く持來れと契て夜に成て弟密に彼の棺の許に行て棺の蓋を仰様に置て其の上に裸にて髻を放て仰様に臥して刀を身に引副へて隱して持たりけるに夜半には成ぬらむと思ふ程に和ら細目に見けれは天井に光る様に

す二度許光て後天井を掻開て下來る者の有り目を不見開ねは慥に何者とも不見す大きやかなる者板敷にとうと着すなり此る程に眞さを に光たり此の者臥たる棺の蓋を取て傍に置むと爲るを押量てひたと抱付て音を高く擧て得たりをうと云て脇と思しき所に刀を欄口まて突立てつ其の時に光も失ぬ而間兄の儲けて待つ事なれは兄程无く火と燃て持來たり抱き付乍ら見れは大きなる野猪の毛も无きに抱付て脇に刀を被突立て死て有り見るに糸奇異き事无限し此を思ふに棺の上に臥たる弟の心糸むくつけし死人の所にハ必す鬼有りと云ふに然ゝ臥たりけむ心極て難有し野猪と思る時にこそ心安けれ其の前は只鬼とこそ可思けれ火燃して疾く來る人は有なむ多野猪は由无き命亡を奴也となむ語り傳へたるとや

於播磨國印南野殺野猪語第卅六

今昔西の國より脚力にて上ける男有けり夜を晝に成して只獨り上ける程に播磨の國の印南野を通けるに日暮にけれは可立寄き所や有ると見廻しけれとも人氣遠き野中なれは可宿き所も无し只山田守る賤の小さき菴の有けるを見付て今夜許は此の菴にて夜を明さむと思て這入て居てけり此の男は心猛く□也ける者にて糸輕ひやかにて大刀許を帯てを有ける此く人離れたる田居中なれと夜なれとも服物なとも不脱す不寢すして音も不爲て居たりける程に夜打深更る程に鬚に聞けは西の方に金を扣き念佛をして數の人遥よを來る音有り男糸怪く思て來る方を見遣れは多の人多の火共を燃し烈て僧共なと數金を打念佛を唱へ只の人共多して來る也けり漸く近く來るを見れは早く

葬送也けりと見るに此の男の居たる菴の傍糸近く只來に來れは氣六借き事无限し然て此の菴より二三段許を去て死人の棺を持來る葬送に然れは此の男彌よ音も不爲て不動て居たり若し人なと見付て問はゝ有のまゝに西の國より上る者の日の暮れて菴に宿れる由を云はむなと思て有るに夕葬送爲る所は兼てより皆其の儲して驗き物を此れは書る然も不見さりつれは極て怪き事かなと思ひ居たる程に多の人集り立並て然葬畢てそ其の後夕鋤鋤鍬なと持たる下衆共員不知す出來て墓を只築に築て其の上に卒都婆を持來て起つ程无く皆拈畢て後に多の人皆返ぬ此の男其の後中々に頭毛太りて怖しれ事无限し夜の疾く明よかしと心もと无く思ひ居たるに怖しきまゝに此の墓の方を見遣て居たり見れは此の墓の上動く樣に見ゆ僻目かと思て吉く見れは現に動く何て動くにか有らむ奇異き事かなと思ふ程に動く所より只出に出つる物有り見れは裸なる人の土より出て胫身なとに火の付たるを吹掃ひつゝ立走て此の男の居たる菴の方樣に只來に來る也けり暗けれは何物とゝ否不見す器量く大にやかなる物也其の時に男の思ゝく葬送の所にゝ必に鬼有なり其の鬼の我れを噉ゝむとて來にこそ有けれ何樣にても我ゝ身ゝ今ゝ限り也けりと思ふに同死にを此れ菴ゝ挾けれゝ入なゝ惡かりなむ不入ぬ前に鬼に走り向て切らむと思て大刀を拔て菴より踊出て鬼に走り向て鬼をふつと切つれゝ鬼被切て逆樣に倒れぬ其の時に男人鄕の近き方樣へ走を逃る事无限し遥に遠く走り逃て人鄕の有けるに走り入ぬ人の家の有けるに和ら寄て門脇に曲まり居て夜の明るを待つ程心もと无し夜明て後に男其の鄕の

人共に會て然々の事の有つれゝ此く逃て來れる由を語れゝ鄉の人共此れを聞て奇異と思て去來行て見むと云て若き男共の勇たる數男を具して行て見けれゝ夜前葬送せし所に墓も卒都婆も无し火なとも不散す只大きなる野猪を切殺して置たり實に奇異き事无限し此れと思ふに野猪の此の男の菴に入けるを見て恐さむと思て謀たりける事にこそ有めれ益无き態して死ぬる奴かなゝとそ皆人云嗤ける然れゝ人離れたらむ野中なむとには人少にてゝ不宿ましき事也けり然て男の京に上て語けるを聞繼て此く語り傳たるとや

狐變大杉木被射殺語第卅七

今昔□□の比春日の宮司にて中臣の□□と云ふ者有けり其れか甥に中大夫□□と云ふ者有けり其れか馬の食失たりけれは其れ求むとて其の中大夫從者一人を具して我ゝ胡錄無賀て出けり其の住む所の名をゝ奈良の京の南に三橋と云ふ所也けり中大夫其の三橋より出て東の山樣に求め入て二三十町許行けれゝ日も暮畢て夜に成けりたほろ月夜にてそ有ける馬や食立ると見行ける程に本の大きさ屋二間許ゝ有らむを見ゆる程の杉の木の長廿丈許有ける一段許去きて立りけれは中大夫此れを見付て其に突居て此の從者の男を呼寄せて云く若し我か僻目か怪物のに迷はされて不思懸ぬ方に來たるか此の立る杉の木ゝ和尊の目には見ゆやを問けれは男已も然か見侍りと答ふれは中大夫然らゝ我か僻目には非て迷ゝし神に値て不思懸ぬ所に來にたるにこそ有なれ此の國に取て此許の杉の木有とは何こにてか見たると問けれは從者の男更に思ふ不侍す其々なそ杉の木一本侍れと

も其れゝ小き木也と云けれは中大夫然れはよ既に迷ゝされにけるそ何かせむと爲る極て怖し去來返なむ家より何町許來にたるらむ六借き態かなと云て返なむを爲る時に従者の男の云く此許の事に値て故も无く過しるむは下の事なるへし此の杉の木に箭を射立て置て夜明てこそ尋て御覽せめと云けれは中大夫現に然も有る事也去來然ゝ二人して射むと云て主も従者も共に弓に箭を番てけり従者の男然らゝ今少し歩ひ寄て射させ給へと云けれゝ共に歩ひ寄て二人乍ら一度に射たりけれゝ箭の尻答ふと聞けるまゝに其の杉の木俄に失にけり然れゝ中大夫然れはよ物に値にけるにこそ有けれ怖し去來還なむと云て逃るが如くにして返けり然て夜明にけれゝ朝に中大夫従者を呼て去來夜前の所に行て尋て見むと云て従者と二人行て見けれゝ毛も

无く老たりける狐の杉の枝を一つ咋へたりけるゝ腹に箭を二ッ被射立てこそ死て臥たりけれ此れを見て然れゝこそ夜前は此の奴の迷ゝしける也けれと云て箭打拔て返にけり此の事は只此の二三年か内の事なるへし世の末にも此る希有の事は有けり然れは道を踏違は不知す方に行かむをも怪むへき事也となむ語り傳へたるとや

狐變女形値播磨安高語第卅八

今昔播磨の安高と云ふ近衛舎人有けり右近の將監貞正か子也法建院興聚の御隨身にてなむ有ける未た若かりける時殿ゝ内裏に御ましける間に安高か家は西の京に有けれは安高内に候けるか従者の不見えさをけれゝ西の京の家へ行くとて只獨り内通りに行けるに九月の中の十日許の程なれは月極く明きに夜打深更て冥の松原の程に濃き打た

る袙に紫菀色の綾の袙重ねて着たる女の童の前に行く樣體頭つき云はむ方なく月影に□て微妙〜安高は長き沓を履をこそめき行くに歩ひ並て見れは繪書たる扇を指隱〜て顏を吉くも不見せす額頰なとに髮捻懸たる云いむ方无く嚴氣也安高近く寄て觸這に薫の香極く聞ゆ此く夜深更たるは何れの御方の人の何こへ御するそと安高云へは女西の京に人の呼へは行くやと答ふ安高人の許へ御せむよりと安高り去來給へと云へは女咲たる音にて誰と知てかいと答ふる極く愛敬付たり此く互は語ひ行く程は近衞の御門の内は歩ひ入ぬ安高か思ふ樣豐樂院の内は人謀る狐有と聞くそ若し此れは然にもや有らむ此奴恐して試む顏をつふと不見せぬか恠きにと思て安高女の袖を引へて此に暫〜居給へれ聞ゆへき事有りと云へは女扇を以て顏は指隱〜てかゝやくを安高實には我れは引剝そしや衣剝てむと云ま、に紐を解て引褊きて八寸許の刀の凍の樣なるを拔て女は指宛てしや吮搔切てむと其の衣奉れと云て髮を取て柱に押付て刀を頸に指宛つる時に女艶す晁ゎ尿を前に散と馳懸く其の時に安高驚て免す際に女忽に狐に成て門よを走り出てこう〜と鳴て大宮登に逃て去ぬ安高此れを見て若し人にや有らむと思るこそ不殺さりはれ此く知たらましかは必す殺てましと妬く悔〜く思ゑけれとも甲斐无くて止にけり其後安高夜中曉と不云す内通りに行なれとも狐懲にけるにや更に不値さをけり狐微妙き女と變〜て安高を□さむと爲る程に希有の死を不爲す〜てなむ有ける然れは人遠からむ野なむとにて獨り間に吉き女なとの見えむをそ廣量して不觸這ま〜き事也此れも安高か心はへの有て

女は強に不就すして不被□ぬ也となむ語り傳へたるとや

狐變人妻形來家語第卅九

今昔京に有ける雜色男の妻夕暮方に暗く成る程は要事有て大路に出たりけるが良久く不返來さりけれは夫何と遲く來ならむと怪く思て居たりける程に妻入來たり然て暫許有る程は忽同顏にして有樣露許も違たる所も无き妻入來たり夫此れを見るに奇異き事无限し何にまれ一人の狐なとにこそ有らめと思へども何れを實の妻と云ふ事を不知ねは思ひ廻すに後に入來たる妻こそ定めて狐はては有らめと思て男大刀を拔て後に入來たりつる妻に走り懸りて切らむと爲れは其の妻此の何かに我れをの此の爲るそと云て泣けの忽前に入來たりつる妻を切らむとて走り懸れの其れも忽手と摺て泣き迷ふ然れの男思ひ繚て此彼騷く程に尙前に入來たりつる妻の怪く思ふけれの其れを捕へも居たる程に其の妻奇異く晁き尿を散と馳懸たりけれの夫晁さに不堪すして打免たりける際に其の妻忽に狐に成て戸の開たりけるより大路に走り出てこう〳〵と鳴て逃去にけり其の時に男妬く悔しく思け社とも更に甲斐无し此れを思ふに思量も无かりける男也かし暫く思ひ廻して二人の妻を捕へて縛り付て置たらましかは終には顯れなまし糸口惜く逃したる也鄕の人共も來集て見嘲ける狐も益无き態なる希有の命を生てそ逃にける妻の大路に有けるを見て狐の其の妻の形と變して謀たりける也然れは此樣の事の有らむにの心を靜めて可思廻き也希有に實の妻を不殺さりける事こそ賢けれとそ人云けるとなむ語り傳へたるとや

狐託人被取玉乞返報恩語第四十

今昔物の氣病爲る所有けり物託の女に物託て云く己れ狐也祟を成し
て來れるに非す只此る所には自ら食物散ろふ物をやしと思て指臨き
侍るを此く被召籠て侍る也と云て懷より白き玉の子柑子なとの程な
る取出て打上て玉ゝ取るを見る人可咲氣なる玉かな此の物託の女の
本より懷に持て人謀らむと爲るなめりと疑ひ思ける程に傍に若き侍
の男の勇たるか居て物託の女の其の玉を打上たるを俄に手ゝ受て取
て懷に引入れてけを然れは此の女ゝ託たる狐の云く極き態かな其の
玉返し得させよと切に乞けれとも男聞きも不入すして居たるを狐泣
々く男に向て云く其れ其の玉取たりと云ふとも可持き樣を不知ねは
和主の爲には益不有し我れは其の玉被取なは極て損ゝてなむ可有き

然れ〻其の玉返し不令得すは我れ和主の爲ゝ永く讎と成らむ若し返
し令得たらは我れ神の如くにして和主に副て守らむと云ふ時に此の
男由し无しと思ふ心付て然は必す我々守を成り給はむやと云へは狐
然ら也必を守と成らむ此る者し努々虛言不爲す名物の恩不思知すと
云ふ事无しと云へは此の男此の搦させ給へる護法證せをせ給ふやと
云へは狐實に護法も聞し食せ玉を返し得させたらは慥に守と成らむ
と云へは男懷より玉を取出して女に與へつ狐返々す喜て受取つ其の
後驗者に被追て狐去ぬ而る間人々有て其の物託の女をやかて引へて
不令立すして懷を搜けるに敢て其の玉无かりけり然れは實に託たり
ける物の持たりける也けりと皆人知にけり其の後此の玉取の男大秦
に參て返けるに暗く成る程ゝ御堂を出て返けれは夜に入てを內野を

通けるに應天門の程を過むと爲るに極く物怖しく思えけれゝ何なるまゝと怪く思ふ程に實や我を守らむと云ゝ狐有きかゝと思ひ出て暗きに只獨り立て狐々と呼けれはこう〳〵と鳴て出來にけり見れは現に有り然れゝこそと思て男狐まゝ向て和狐實に虚言不爲さりけり糸哀れ也此を通らむと思ふまゝ極て物怖しきを我れ送れと云けれは狐聞知顔にて見返々々行けれゝ男其の後に立て行くに例の道にゝ非て異道を經て行々て狐立留まりて背を曲て拔足まゝ歩て見返る所有り其まゝに男も拔足に歩て行けゝ人の氣色有り和ら見れゝ弓箭兵仗を帶したる者共數立て事の定めを爲るを垣越しに和ら聞けゝ早う盗人の入らむする所の事定むる也けを此の盗人共ゝ道理の道まゝ立る也けり然れゝ其の道をゝ經て道より將通る也けり狐其れを知て其れ盗人の立て

る道をゝ經たると知ぬ其の道出畢にけれゝ狐ゝ失にけり男ゝ平かに家に返にけり狐此れのみまゝ非す此樣にしつゝ常に此の男に副て多く助くる事共を有ける實に守らむと云けるに違ふ事无けれゝ男返々すま哀れになむ思ける彼の玉を惜むて不與さらましかゝ男吉き事无からまゝ然れゝ賢く渡てけりをそ思ける此れを思ふに此樣の者ゝ此く者の恩を知を虚言を不爲ぬ也けり然れゝ自ら便宜有て可助からむ事有らむ時ゝ此樣の獣をゝ必す可助き也但し人ゝ心有りて因果を可知き者にてゝ有れとも中々獣よりゝ者の恩を不知ぬ不實ぬ心も有る也となむ語り傳へたるとや

高陽川狐變女乘馬尻語第四十一

今昔仁和寺の東に高陽川と云ふ川有り其の川の邊まゝ夕暮方に成れゝ

若き女の童の見目穢氣无き立りける馬に乘て京の方へ過る人有れゝ其の女の童其の馬の尻に乘て京へ罷らむと云けれゝ馬に乘たる人乘れと云て乘せたりけるに四五町許馬の尻に乘て行けるが俄に馬より踊り落て逃て行けるを追けれゝ狐に成てこう〳〵と鳴て走り去にけり如此く爲る事既に度々に成ぬと聞るけるに龍口の本所に龍口共數居て物語しけるに彼の高陽川の女の童の人の馬の尻に乘る事を云出たりける程一人の若き龍口の心猛く思量有けるが云く己れ〳〵彼の女の童をゝ必す搦候なむ〳〵一人の弊て逃すにこそ有れを□の龍口共の勇たる此れを聞て更に否や不搦さらむと云けれゝ此の搦めむと云ふ龍口然らゝ明日の夜必す搦て將參らむと云けれゝ異龍口共ゝ云立ほたる事なれゝ否不搦しと固く諍て明日の夜□□具すして只獨を極て賢き馬に乘て高陽川に行て川を渡るに女の童不見えす即ち打返て京の方へ來るに女の童立り打過るを見て童其の御馬の尻に乘せ給へと打咲て不憚す云ふ樣愛敬付あり龍口疾く乘れ何ち行かむするそと問へは女の童京へ罷るか日の暮ぬれと御馬の尻に乘て罷らむと思ふ也と云へは即ち乘せつ乘するまゝに龍口儲たりつる物なれは指繩を以て女の童の腰を鞍に結付つ女の童何と此はし給ふそと云けれは龍口夕さり將行て抱て寢むすれは逃もそ爲と思へは也と云て將行くほ既に暗く成ぬ一條を東樣に行けれは西の大宮打過て見れは東より多の火を燃して列れて車共數遣次けて前を追ひ皇て來けれゝ龍口可然き人の御するあめりと思て打返て西の大宮の下りに二條まて行て二條より東樣に行て東の大宮より土御門まて行にけり土御門の門ほて

待てと云置たりけれは従者共や有ると問げれは皆候ふと云て十人許出來にけり其の時に女の童を結付たる指繩を解て引落して脇を捕へて門より入て前に火を燃させて本所に將行たれは瀧口皆居並て待けれは音を聞て何にぞと口々に云へは此は搦て候ふと答ふ女の童は泣て今も免し給ひてよ人々の御ますにこそ有けれと侘迷けれとも不免すして將行たれは瀧口共皆出て立並廻て火を明く燃て此の中に放てと云へは此の瀧口は逃もこそ爲れ否不放じと云ふを皆弓に矢を番て只放て與有りしや腰射居ゑむ然りとも一人こそ射□はつさめと て十人許箭を番て指宛て有れは此の瀧口然はとて打放ちつ其の時に女の童狐に成てこう〳〵と鳴て逃ぬ瀧口共の立並たりつるも皆搔消つ樣に失ぬ火を打消つれはつゝ暗き成ぬ瀧口手迷をして從者共を呼ふに從者一人も无し見廻せは何くとも不思えぬ野中にて有り心迷ひ肝騷て怖しき事无限し生たる心地も不爲ねとも思ひ念じて暫く此を見廻せは山の程所れ樣を見るに鳥部野の中にて有り土御門より馬より下つると思ふも馬も何にしにかは有らむ早う西の大宮より打廻ると思つるも此へ來にける也けり一條に火燃て値たりつるも狐の□ける也けりと思て然りとも可有き事に非ねは歩にて漸く返ける程に夜半許にそ家に返たりける次の日は心地も亂れて死たる樣にてそ臥たりける瀧口共は其の夜待けるに不見えさりけれは何主の高陽川の狐搦めむと云しは何にかと口々に云咲て使を遣て呼けれは三日と云ふ夕方吉く病たる者の氣色にて本所に行たりけれは瀧口共一夜の狐は何になむと云けれは此の瀧口一夜は難堪く病の罷發て候ひしかは否不

罷に候ひき然は今夜罷て試候はむと云ければ龍口共此の度は二つを搦めよとそ嘲けれとも此の龍口言少にて出ふけり心の内に思ける様初被謀たれは今夜は狐よも不出來し若し出來たらは終夜也とも身を放さはこそ逃さめ若し不出來をは永く本所へ不指出すして籠居なむと思て今夜は強なる従者共數を具して馬に乗て高陽川に行にけり益无き事に依て身を徒に成さむするかなと思へとも云立にたる事なれは此く爲るなるへし高陽川を渡るに女の童不見ぬす打返ける度川邊に女の童立てり前の女の童の顔にも非す前の如く馬の尻に乗らむと云けれは乗せつ前の様に指繩を以て強く結付て京様に一條を返るに暗く成ぬれは數の従者共を以て或は前に火を燃させ或は馬の喬平に立なとして不驟て物高く云つゝ行けるに一人値ふ者无し土御門にて馬より下て女の童のしや髪を取て本所様に將行けれは女の童泣々く辭けれとも本所に至にけり龍口何々ふと云けれゝ此に有と云て此の度ゝ強く縛て引へたりけれは暫こそ人にて有けれ痛く責けれは遂に狐に成て有けるを續松の火を以て毛もの无くせよ〳〵と燒て□を以て度々射て己よ今よを此る態なせそと云て不殺して放たりけれは否不歩なりけれとも漸く逃て去ふけり然てそ此の龍口前に被謀て鳥部野に行たりし事共委く語ける其の後十餘日許有て此の龍口尚試むと思て馬に乗て高陽川に行たりけれは前の女の童苦く病たる者の氣色ふて川邊ふ立ちたりけれは龍口前の様に此の馬に尻に乗て和見と云けれは女の童乗らむとは思へとも燒給ふか難堪けれはと云て失にけり人謀らむと爲る程に糸辛き目見たる狐也かし此の事は近く事なる

へし奇異の事なれは語り傳へたる也此を思ふに狐い人の形と變する事は昔より常の事也然れとも此れい揭焉く謀て鳥部野まても將行ぬる也然るにては何と後の度は車も无く道も不違さりけるよか人の心よ依て翔なめりとそ人疑ひけるとなむ語り傳へたるとや

左京屬邦利延値迷神語第四十二

今昔三條の院の天皇の御時に石清水の行幸有けるよ左京の屬邦の利延と云ふ者共奉ーて仕たりけるよ九條にて可留りけるを何よ思けるにか長岡の寺戸と云ふ所まて行にけり其を行ける程に人共有て此の邊には迷はーー神有なるをかしと云つゝ渡ける程よ利延も然か聞くそなと云て行けるに日も漸く下れい今は山崎の渡にい行着ぬへきに怪く長岡の邊を過て乙訓の川の邊に行くと思へい忽寺戸の岸を登る寺戸を過て行き持行く程よ乙訓の川に來て渡ると思へい忽過にし桂川を渡る漸く日も暮方に成ぬ前後を見れとも人一人も不見えす成ぬ多く炎き行つる人も皆不見えす而る間夜に成ぬれは寺戸の西の方なる板屋堂の檐よ下居て夜を明して朝思へは我れい左京の官人也早九條よて可留かりけるに此まて來つらむ極まりて由无ーー其れに同所よ絡返し廻行なるは九條の程より迷はーー神の託て將狂いーて行かせけるなめりを思て其れよりなむ西の京の家には返り來たりける然れは迷はし神に値ぬるは希有の事也此く心をも□かーー道をも違へて謀る也狐などの爲るにや有らむ此れは利延ゥ語りし也希有の事なれは此く語り傳へたるとや

賴光郎等平李武値產女語第四十三

今昔源の頼光の朝臣の美濃の守にて有ける時に□□の郡に入て有けるに夜る侍に數の兵共集り居て萬の物語をしけるに其の國より渡と云ふ所に産女有なり夜に成て其の渡爲る人有れは産女兒を哭せて此れ抱々けと云なるなと云ふ事を云出たりけるに一人有て只今其の渡に行て渡りなむやと云けれは平の季武と云者の有て云く己はしも只今也とも行て渡りなむかしと云けれは異者共有て千人の軍に一人懸合て射給ふ事は有とも只今其の渡をは否や不渡給さらむと云けれは季武糸安く行て渡りなむと云けれは此く云ふ者共極て事侍とも否不渡給はしと云立にけり季武も然許云立にけれ〻固く諍ける程に此の諍ふ者共は十人許有けれは只よては否不諍はしと云て鎧甲弓胡録吉き馬に鞍置て打出の大刀なとを各取出さむと懸てけり然季武も若し否不渡すは然許の物を取出さむと契て後季武然は一定かと云けれは此く云ふ者共然ら也遅しと勵ましけれは季武鎧甲を着弓胡録を負て従者も何にか可知きと季武か云く此の負たる胡録の上差の箭を一筋何より彼方に渡て立て返らむ朝行て可見しと云る行に其の後此の諍ふ者共の中に若く勇たる三人許季武か河を渡らむ一定を見むと思て竊に走り出て季武か馬の尻に不送れしを走り行けるに既に季武其の渡に行着ぬ九月の下つ暗の比なれはつゝ暗なるに季武河をさふりゝと渡るなり既に彼方に渡り着ぬ此れ等は河より此方の薄の中に隠れ居て聞けは季武彼方に渡り着て行騰走り打て箭拔る差にや有らむ暫許有て然取て返し渡り來なり其の度聞けは河中の程よて女の音にて季武に現ま此れ抱々けと云なり然兒の音にていかゝと哭な

り其の間生臭き香河より此方まで薫りたり三人有るたにも頭毛太りて怖ろしき事无限し何況や渡らむ人を思ふよ我が身乍も半ば死ぬる心地す然て季武が云ける樣いと抱かむ己と然れば女此れば くはとて取らすなり季武袖の上に子を受取てけれは怪女追々ついて其の子返し令得よと云なり季武今も不返ましと云て河より此方の陸に打上ぬ然て館に返ぬれは此れ等も尻について走返りぬ季武馬より下て内に入て此の諍つる者共に向て其達極く云つれとも此く□□の渡に行て河を渡て行て子をさへ取て來ると云て右の袖と披たれば木の葉なむ少し有ける其の後此く竊に行たりつる三人の者共渡の有樣を語けるに不行ぬ者共半は死ぬる心地なむしける然て約束のまゝよ懸たりける物共皆取出したりけれとも季武不取すして然云ふ許也然許の事不爲ぬ者やは有ると云てなむ懸物ゝ皆返し取せける然れば此れを聞く人皆李武とそ讃ける此の産女と云ふゝ狐の人謀らむとて爲ると云ふ人も有り怪女の子産むとて死たるが靈に成たると云ふ人も有りとなむ語り傳へたるとや

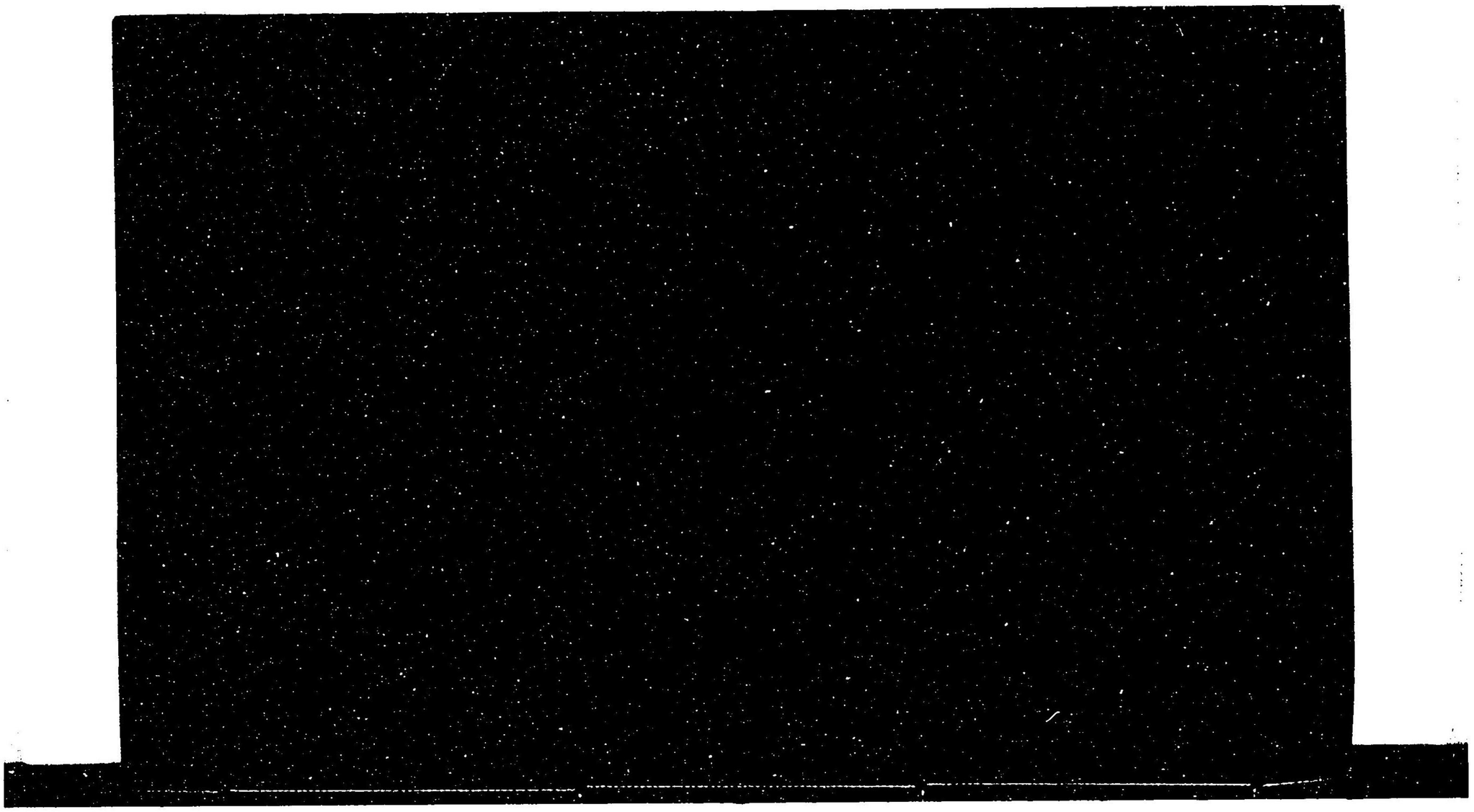
遠鈴鹿山三人入宿不知堂語第四十四

今昔伊勢の國より近江の國へ超ける若き男三人有けり下衆なれとも三人乍ら心猛く思量有けり鈴鹿の山を通けるに其の山中に昔より何かに云始けるにか有けむ鬼有とて人更に不宿ぬ舊堂有けり然許の道中なる堂なれとも此く云傳へて人更に不寄す而る間此の三人の男山を通る間に夏比也けれゝ俄に掻晴(曇)かりて夕立しけれは今や止々むと木の葉の滋き下に立入て待つゝ更に不止ねゝ日ゝ只暮れに暮ぬれゝ

一人有て去來彼の堂に宿なむと云けるを今二人有て此の堂ゝ昔より鬼有とて人不寄ぬ堂にゝ何にか云けれゝ先つ宿らむと云つる男此る火てに實鬼有らゝ然も知らむ多被噉なゝ何かゝ不死まゝき徒死せよ四し多狐野猪なとの人謀とーてける事を此く云始めて云傳へたるにも有らむと云へゝ二人の男ゝ恐に然らゝ然もと云ふに日も暮れて暗く成つれゝ此の堂に入て宿ぬ此る所なれゝ三人乍ら不寢て物語ーて居たる程に一人の男の云く書通るに山中に死たる男有りつ其れ只今行て取て來なむや何にと此の前ゝ宿らむと云つる男何とか取て不來さらむと云けるを今二人の男更に其れ取に只今否不行しと勵ましけれゝ此の男いて然らゝ取て來らむと云て忽に着物を只脱きに脱て裸に成て走り出て行ぬ雨ゝ不止す降てつゝ暗なるに今一人の男多着物を脱て裸に成て前ゝ出つる男の後に立て出ぬ前の男よりゝ喬より縮に走り前立て彼の死人の在つる所に至ぬ然て其の死人をゝ取て谷に投弃て其の跡に臥ぬ而る間前の男來て死人の替に臥たる男を搔負ゝむと爲るを此の被負る男負ふ男の肩をひしと食たりけれゝ負ふ男此な不食給そ死人よと云て搔負て走て行て堂の戸の許に打置て彼の主達此ゝ負て來たりと云て堂の内ゝ入たる間に被負たりつる男ゝ逃て去にけり返り出て見れゝ死人も无れゝ早う逃て行にけりと云も立て其の時に被負たりつる男喬より出來て咲て有樣を語けれゝ物に狂ふ奴ゝなと云てなむ二人乍ら堂の内に入けける此の二人の男の魂何れも不劣にとゝ云乍ら負來つる男ゝ增れり死人に成る者ゝ有もしなむ行て負持來たる者ゝ難有かりなむ多其の二人の男の出て行た

りける間に堂の天井より組入の子毎に様々の希有の顔共を指出たりける然れゝ此の一人の男大刀を拔てひらめかしけれゝ一度に散と咲て失にけり其の男其れにも不驚さりけり然れゝ其の男の魂も不劣にやし三人乍ら極かりける者共かな夜明にけれゝ出て近江の方に超にけり此れを思ふに其の天井にる顔指出けむ物ゝ狐の謀けるにこそ有らめとそ思ゆる其れを人の鬼有とゝ云傳へたりけるにや其の三人の者共平かに堂に宿て出にける後別の恐れ无かりけり實の鬼ならむゝ其の庭にも後也とも平かにゝ有なむや此なむ語り傳へたるとや

近衛舎人於常陸國山中詠歌死語第四十五

今昔□□の比□□の□□と云近衛舎人有けり神樂舎人なとにて有るにや歌をそ微妙く詠ける其れか相撲の使にて東國に下たりけるに陸奥國より常陸國へ超る山をゝ燒山の關とて極く深き山を通る也其の山を彼乃□□通けるに馬眠をして徒然かりけるに打驚くまゝに此ゝ常陸の國をかし遥にも來にける者かなと思けるに心細くて泥障を拍子に打て常陸歌と云歌を詠て二三返許押返して詠ける時に極く深き山の奥に恐し氣なる音を以て穴讃と云て手をはたと打けれゝ□□馬を引留めて此ゝ誰か云つるそと從者共に尋けれとも誰り云つるそとも不聞すと云けれゝ頭毛太りて恐ーと思々ふ其を過にけり然て□□其の後心地惡くて病付たる樣に思らけれゝ從者共なと怪ひ思ひけるに其の夜の宿るーて寢死る死けり然れは然樣ならむ歌なとをは深く山中なとるては不可詠す山神の此れを聞て目出る程に留る也此

れを思ふに其の常陸歌は其の國の歌にて有けるを其の國の神の聞き目出て取てけるなめりとそ思ゆる然れは此れも山神なとの感して留てけるにこそは由无き事也從者共奇異く思ひ歎きけれとも相搏て京に上て語けるを聞繼き此く語り傳へたるとや